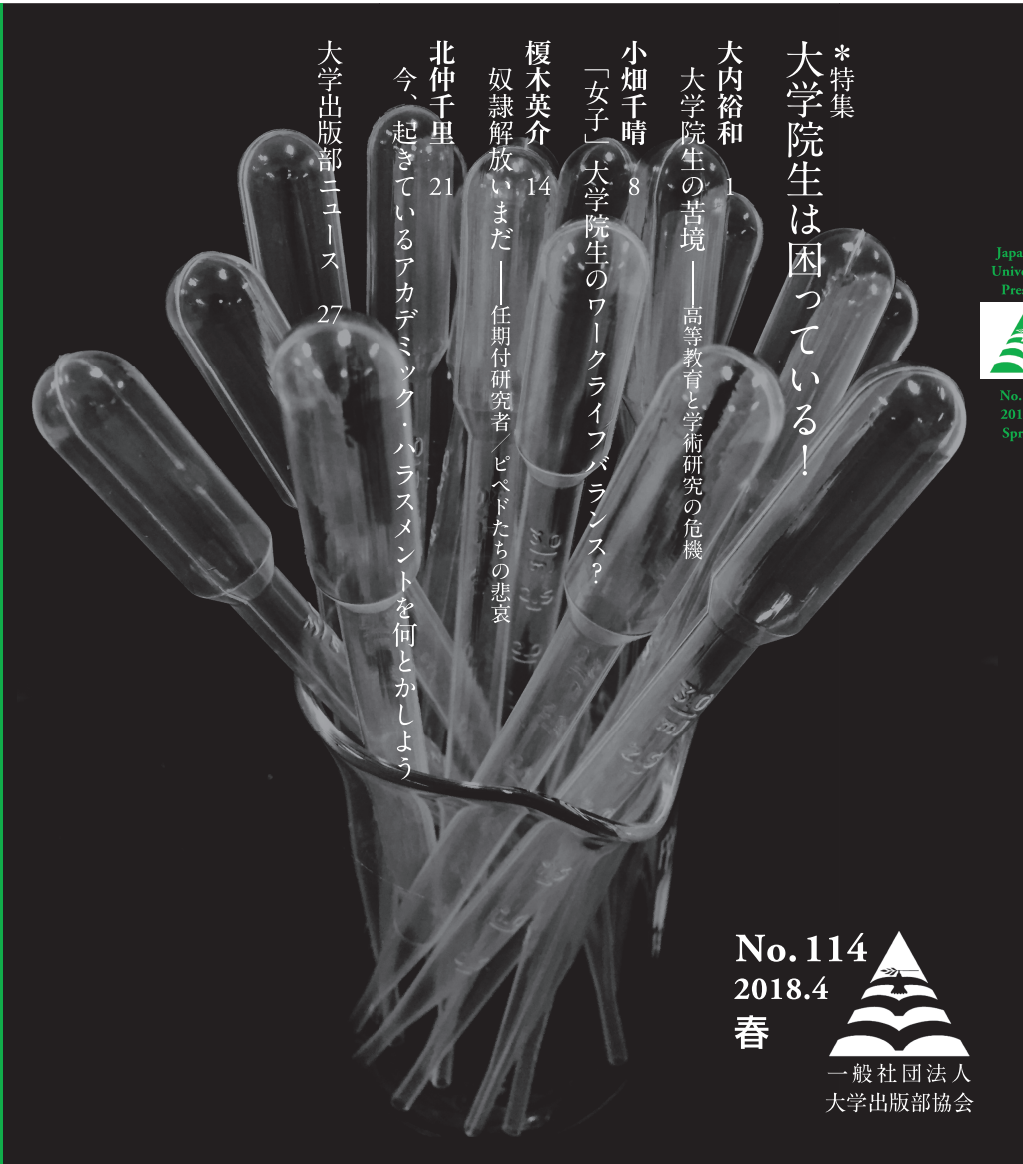
大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES



＊特集
大学院生は困っている！

大内裕和 1
大学院生の苦境 ――高等教育と学術研究の危機

小畑千晴 8
「女子」大学院生のワークライフバランス？

榎木英介 14
奴隷解放いまだ ――任期付研究者／ピペドたちの悲哀

北仲千里 21
今、起きているアカデミック・ハラスメントを何とかしよう

大学出版部ニュース 27

No. 114
2018.4
春

一般社団法人
大学出版部協会

大学出版部協会　新刊ご案内

ブックレット第4弾

対立を乗り越える心の実践

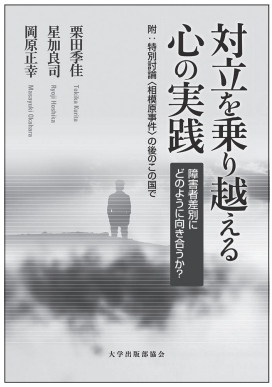
障害者差別にどのように向き合うか？

栗田季佳・星加良司・岡原正幸

大勢の障害者の命が奪われた〈相模原事件〉を起こす影は，私たちの内にある．制度や「ねばならない」的教導では，差別はなくならない．「潜在化する偏見」を炙りだし，その原因となる心のメカニズムと社会的背景にまで遡って考察することで，差別解消への糸口を考える．

［発行：大学出版部協会／発売：東京大学出版会］

ISBN978-4-13-003153-0　2017年2月刊行
A5判／88頁／本体1,000円＋税



主要目次

第１章　見えない偏見
障害者を取り巻く問題に現れる心の動き　（栗田季佳）

第２章　バリアフリーという挑戦
「社会を変える」ことは可能か　（星加良司）

第３章　生の問題として〈対立を乗り越える〉を考える　（岡原正幸）

第４章　討論
対立を乗り越える学問の挑戦　（栗田季佳・星加良司・岡原正幸）

第５章　特別討論〈相模原事件〉の後のこの国で
有事モード下の差別と偏見

特集＊大学院生は困っている！

大学院生の苦境——高等教育と学術研究の危機

大内裕和（中京大学国際教養学部教授）

1　大学院生の経済的状況

大学院生の多くは、経済的にとても厳しい状況に置かれている。全国大学院生協議会が行った「二〇一七年度大学院生の研究・生活実態に関するアンケート調査」は、そのことを明確に示している。

まず、多くの大学院生がアルバイトに追われ、自分の研究に専念することが難しいという結果が出ている。大学院生のうちアルバイトに従事している割合は八一・五％にも達している。二〇一五年の六九・〇％、二〇一六年の七九・二％を上回り、全体の八割以上の大学院生が何らかのアルバイトをしていることになる。

アルバイトに従事する時間が長い点も重大である。アルバイトに従事している大学院生の五六・三％が週に一〇時間以上働いていると回答した。週に二〇時間以上働いている大学院生も二八・四％に達している。学外のアルバイトの目的については八九・四％が「生活費をまかなうため」、七〇・五％が「学費・研究費をまかなうため」と回答している。多くの大学院生が大学院での研究を継続するために、長時間のアルバイト労働を強いられていることが分かる。

また、収入の不足や学費の負担が研究に与える影響について「影響はない」は三三・六％にとどまっており、六六・四％の大学院生は何らかの影響を受けていると回答している。

具体的な内容としては「アルバイトやＴＡなどをしなくてはならない」が四五・九％、「研究の資料・書籍を購入できない」が三三・四％、「学会・研究会に行けない」が二四・九％、「調査・フィールドワークに行けない」が一六・四％と続く。「授業料が払えない・滞納したことがある」という回答も七・五％あった。多くの大学院生が、「ア

ルバイトをすれば研究時間を失い、アルバイトをしなければ研究生活の資金が不足する」という悩みに引き裂かれていることが分かる。

研究を支えるための奨学金制度の不備も、大学院生を追い込んでいる。日本学生支援機構の行った「二〇一四年度学生生活調査」によれば、大学院生の奨学金利用者の割合は修士課程五五・四％、博士課程では六二・七％に達している。そのなかで多くを占めている日本学生支援機構の奨学金はそのすべてが返済を要する貸与型で、半数以上が有利子のローンとなっている。

全国大学院生協議会の「二〇一七年度大学院生の研究・生活実態に関するアンケート調査」によれば、全体の六一・三％が奨学金の利用経験があり、また全体の四九・二％が「貸与型奨学金を利用している・利用したことがあり、今後奨学金の返済をする必要がある」と回答している。奨学金を借りている大学院生の借入総額は半数以上の五三・一％が三〇〇万円以上、二六・〇％が五〇〇万円以上、一一・六％が七〇〇万円以上に達している。多くの大学院生が多額の借金を背負っていることが分かる。

多額の奨学金を借りている大学院生が多いと同時に、将来の返済を心配して奨学金を借りることを抑制する大学院生も少なくない。奨学金を利用しない理由を尋ねた質問に対して、四七・〇％が「借金をしたくないため・返済が不安であるため」と回答している。「利用する必要が無いため」という回答は、わずか八・一％に過ぎない。利用する必要があるにもかかわらず、約半数の大学院生が将来の返済に不安を感じて、奨学金を借りない選択をしている。

授業料・研究費・生活費の負担主体を尋ねた質問（複数回答可）に対する答えは、授業料については奨学金（二一・六％）がアルバイト（一四・九％）を上回っていたものの、研究費についてはアルバイト（三三・九％）が奨学金（一九・一％）を大きく上回り、生活費についてもアルバイト（四五・〇％）が奨学金（二八・〇％）に大差をつけている。

これは多くの大学院生が研究時間を削ってでも、奨学金を借りることを避ける傾向を示している。大学院生への経済支援として、貸与型奨学金制度が十分な役割を果たしていないことは明らかである。

2　学部時代から積み重なる問題
――奨学金とブラックバイト

大学院生にとってアルバイトと奨学金の現状が、研究生活を進める上で大きな負担となっていることは明らかである。このことを考える際には、学部時代から積み重なっている問題を認識することが重要である。

第一に奨学金制度の変化である。貸与型奨学金の有利子化と奨学金利用者の増加が重大である。一九八四年の日本育英会法の全面改定によって、それまで無利子のみであった奨学金に有利子枠が創設された。

政府はその後、有利子貸与奨学金を増加させた。有利子貸与奨学金の増加に拍車をかけたのが、一九九九年四月の「きぼう21プラン」であった。ここで有利子貸与奨学金の採用基準が緩和されるとともに、貸与人数の大幅な拡大が図られた。有利子貸与型奨学金の貸与人数は一九九八年度の一一万人から一九九九年度には二四万人に、事業予算規模は六五〇億円から一六六〇億円へと、どちらも大幅に増加した。そして二〇〇四年に日本育英会は廃止され、日本学生支援機構への組織改編が行われた。また、一九九八年に小・中・高校の教育職の返還免除制度が廃止され、二〇〇四年には大学などの研究職の返還免除制度も廃止された。

独立行政法人である日本学生支援機構は、奨学金制度を「金融事業」と位置づけ、その中身をさらに変えていった。

図1　奨学金貸与人数の推移

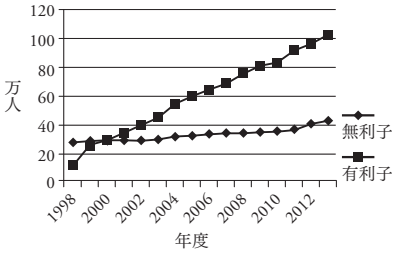
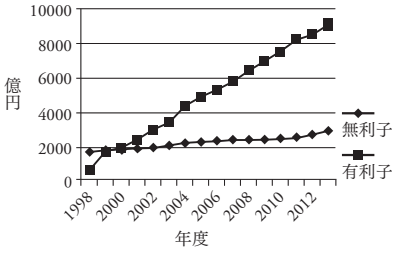


図2　奨学金事業費の推移



二〇〇七年度以降は民間資金の導入も始まった。この過程で、一九九八年から二〇一三年度の一五年間に、有利子の貸与人員は九・三倍、事業費は一四倍にも膨れ上がった。無利子の貸与人員は約一・六倍、事業費は約一・七倍であるから、この間に奨学金利用者が急増したと同時に、奨学金制度の中心は無利子から有利子へと移行したことになる（図1、図2）。

日本学生支援機構の奨学金は、大学生の奨学金全体の大半を占めている。大部分の奨学金が貸与（二〇一七年四月から給付型奨学金制度が導入された）で、そのなかの多数が有利子であるということは、厳しい経済条件を学生に強いている。有利子奨学金は卒業後に借りた以上のお金を返さなければならない。また、無利子奨学金が月三万円台～六万円台の範囲であるのに対して、有利子奨学金は学部生の最高額が月に一二万円であり、無利子奨学金よりも多額の利用であることが多い。このことも学生の返済負担をより重くすることになる。

貸与型奨学金の有利子化に加えて、学部生の奨学金利用者の割合も急増した。

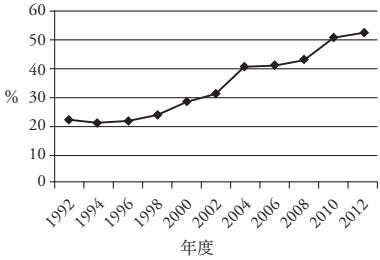
一九九〇年代後半までは、世帯年収の増加が続いたこともあって、大学学費を支払うことのできる世帯が多数派を占めていた。しかし、一九九〇年代後半以降の世帯年収の減少は、大学の学費を支払うことを困難にした。

民間企業労働者の平均年収は一九九七年の四六七万円が

ピーク、平均世帯年収は一九九四年の六六四万円がピークである。しかし、その後どちらも急速に下がっていく。二〇一四年の民間企業労働者平均年収は四一五万円、平均世帯年収は五四二万円である。ピーク時からそれぞれ五二万円、一二二万円もダウンしている。この状況では、学生の親・保護者が大学の学費を支払うことは容易ではない。この期間に奨学金利用者は急増することになった。

図3は大学学部昼間部の学生全体のなかでの奨学金利用者の比率の推移を示したものである。これを見ると一九九〇年代半ばまでは、一九九二年に二二・四%、一九九四年に二一・四%と二割をやや上回る比率だった。しかし、その後比率は急上昇し、二〇〇四年には四一・一%と四割を突破、二〇一二年には五二・五%と全体の半数以上となった。

図3　奨学金利用者率の推移



ある一定以上の高齢の方は、奨学金について「経済的に厳しい、ごく少数の家庭の出身者」が利用するというイメージを持っていることが多い。しかし、そのイメージは現在ではまったく違っている。何らかの奨学金を利用している学生は全学生の半数を超えている。

第二に、大きな変化としては学生アルバイトの変化である。学生のアルバイトが過酷になっていることを二〇一〇年以降、強く感じるようになった。深夜のアルバイトによって授業中に寝てしまう学生、アルバイトで授業に出られない学生、アルバイトのために試験前や試験期間中に勉強できないと悲鳴を上げる学生が、急速に増加した。

そこで二〇一三年の春に学生アルバイトの調査を行った。すると、本人の意志を無視したシフトの強要、賃金未払い、厳しいノルマとそれを達成しない場合の買い取りの強制（いわゆる「自爆営業」）、パワハラやセクハラなどが横行していることが判明した。その内容を、私のフェイスブックで公表したところ、全国から「自分の地域も同じです」という反響があった。これが全国共通の現象であると分かり、二〇一三年六月にこうしたアルバイトのことを私は「ブラックバイト」と名づけた。

ブラックバイトを私は次のように定義している。「学生であることを尊重しないアルバイトのこと。フリーターの増加や非正規雇用労働の基幹化が進むなかで登場した。低賃金であるにもかかわらず、正規雇用労働者並みの義務やノルマを課されたり、学生生活に支障をきたすほどの重労働を強いられることが多い」。

二〇一四年七月に「ブラック企業対策プロジェクト」が、全国二七大学の学生を対象に「学生アルバイト全国調査」を実施した。この調査では四七〇二人から有効回答を得る

ことができ、対象となった大学の六六・九％がアルバイトで「不当な扱い」を経験していることが分かった。初の全国規模の調査で、ブラックバイトの経験率が約七割もあるという結果には大きな反響があった。

アルバイトで不当な扱いを受けた経験についての質問の答えとしては、「準備や片づけの時間に賃金が支払われなかった」「仕事が延びても残業代が時間通り支払われなかった」「残業代が割増賃金ではなかった」「一日に六時間を超えて働いても休憩時間なし」といった、明確な労働基準法違反を含めて、さまざまな問題点が挙げられた。

ブラックバイトのポイントは、「学生であることを尊重しないアルバイト」という定義からも分かるように、学生生活との両立不可能性である。アルバイトのために試験や課題（レポートなど）の準備時間が取れなかった経験についての質問の回答は次のようになった。

「よくある」が五・四％、「ときどきある」が一三％、「何度かある」が二一・六％で、合わせると約四割の学生、アルバイトが学業に支障をきたしたことがあると答えている。かなり多くの学生にとって、アルバイトが学業の妨げになっていることが分かる。

学部生にとっての貸与型奨学金の有利子化と奨学金利用者の増加に見られる奨学金の変化とブラックバイトの広がりは、大学院生の研究生活にも重大な影響を及ぼしている。

奨学金利用者が学部生全体の半数以上となり、その多くが有利子貸与となっている。学部時代に借りた奨学金が原因で、大学院進学そのものを諦める学生も多い。大学院に進学したとしても、学生は学部時代に借りた奨学金の返済に悩まされることになる。学部時代にプラスして大学院でも貸与型奨学金を利用すれば、借金がさらに膨らむことになる。

利用する必要があるにもかかわらず、約半数の大学院生が将来の返済に不安を感じて、奨学金を借りない選択をしているという調査結果をすでに紹介したが、学部時代にすでに奨学金を借りていることがその原因となっている割合

ことばは、自由だ。

広辞苑 第七版
—好評発売中—
【普通版】特別価格……本体8500円
【机上版】特別価格…本体13,000円
特別価格は2018年6月30日まで

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）
http://www.iwanami.co.jp/

は少なくないだろう。

日本学生支援機構の奨学金の返済免除制度が廃止されたことの影響も大きい。大学などの研究職に就職すれば奨学金返済が免除されるという制度の存在は、研究者を目指す学生たちにとって、一定の希望を与えてくれるものであった。それは研究職を目指す学生のモティベーションを高める側面をも持っていた。小・中・高校教員の免除制度の存在も、「教員に就職すれば奨学金は返さなくて済む」ことから、返済不安を抱える学生たちに一定の安心感を与える役割を果たしていたと言える。返済免除制度の廃止は、こうした一定の希望や安心感を奪ってしまった。

ブラックバイトの広がりも、大学院生の研究生活に多大な影響を与える。ブラックバイトの広がりは、アルバイトの労働強化と賃金低下をもたらしている。研究を主たる生活とする大学院生にとって、責任が比較的軽く、短時間で一定以上の額を稼ぐことができるアルバイトが豊富に存在することは、極めて貴重な意味を持つ。しかし、ブラックバイトの広がりは良質なアルバイトを減らし、大学院生の研究生活にとって大きなマイナスをもたらすことになる。

3　大学院生の困難——学術研究の危機

大学院修了後の進路の困難も大学院生を苦しめている。文部科学省科学技術・学術政策研究所（NISTEP）が、二〇一五年三月に発表した「大学教員の雇用状況に関する調査」では、東京大学や筑波大学など規模の大きい一一の大学について、任期無し教員は、二〇〇七年度では一万九三〇四人だったのが、二〇一三年度では一万七八七六人に減少した。それに対して任期付き教員は、七二一四人から一万一五一五人へと大幅に増えていた。

任期付き教員の多くは二〇歳代～三〇歳代が占めていた。また、二〇〇七年度と二〇一三年度を比較すると四〇歳～四四歳は、任期無しの教員が減っている一方で任期付きの教員が一〇〇〇人以上増えており、四〇歳代になっても、任期付きのままでいる教員が増えている事実が浮き彫りになった。研究職に就こうと思っても任期制の職が多く、任期なしのポスト獲得が困難な状況が見て取れる。

任期無しポスト獲得の困難は、大学院生に大きな精神的負担をかけている。「二〇一七年度大学院生の研究・生活実態に関するアンケート調査」では大学院生活での研究・生活上の懸念について尋ねている。その回答のトップが「就職」（六七・二％）である。多くの大学院生に、将来の就職への不安が重苦しくのしかかっている。

大学院生活での研究・生活上の懸念は、「就職」に続いて、「研究の見通し」（六四・八％）、「生活費の工面」（六二・八％）などが高い比率を示している。「研究費の工面」（四三・八％）、「授業料の工面」（三六・九％）、「奨学金の返済」（三五・三％）の比率もかなりの割合となっていることから、将来不安を抱えながらの経済的困窮が大学院生にとって大きな

懸念となっていることが分かる。

また、「結婚・出産・育児」というライフワークバランスの懸念も二八・九％に達している。研究活動の状況についての質問では、心身の不調を訴えた回答が一六・八％あった。研究生活の不安や懸念が、自分のライフコースの選択も含めて心身の状況に悪影響を与えている。

近年、大学改革の名で浸透している成果主義や業績主義がもたらす影響も大きい。成果主義・業績主義が「悪い影響を与えている」と回答した大学院生のなかから、その中身として「短期的成果が求められ、じっくり取り組めない」（七七・六％）、「成果の出しやすい研究テーマへ変える必要性を感じる」（六一・二％）など、研究の質や研究テーマの多様性を損なう危険性を示す回答が出されている。

こうした厳しい状況から研究者への道は困難だとして、大学院修士課程の修了者が博士課程に進学する割合は近年低下している。文部科学省の科学技術・学術政策局が二〇一五年五月にまとめた調査「若手研究者をめぐる状況について」によると、二〇〇四年には修士課程の修了者六万九〇七三人のうち、九七〇八人が博士課程に進学していたが、二〇一三年には修士課程の修了者が七万六五一一人に増えているにもかかわらず、進学者は七二七四人と二〇〇〇人以上減っている。博士課程進学者の減少は、学術研究の発展にとって危機的な事態であると言えるだろう。

大学院生の苦境は個々の大学院生の困難にとどまらず、将来の高等教育と学術研究の基盤を揺るがす大きな問題である。奨学金制度の改善、学費負担の軽減、大学院生の研究環境の改善、そして若手研究者への任期無しポストの増加など、総合的な改善策を早期に実施すべきである。

参考文献

大内裕和（２０１６）『ブラックバイトに騙されるな！』集英社クリエイティブ

大内裕和（２０１７）『奨学金が日本を滅ぼす』朝日新聞出版

特集＊大学院生は困っている！

「女子」大学院生のワークライフバランス？

小畑千晴（徳島文理大学人間生活学部准教授）

男子大学院生には「ない」が、女子大学院生に「ある」問題とは。

その一つがテーマとして提示された「ワークライフバランス」なのであろう。私はもうそこでひっかかる。

＊

私はある国立大学の「女性のための相談室」で六年間、臨床心理士として勤務していた。相談室開設の背景には、二〇〇六年の文部科学省による女性研究者研究活動支援事業が大きく関与している。同時期、多くの大学で「男女共同参画室」という新規部署が設置され、女性研究者の支援を担う部署として位置づけられた。私が在籍した大学では、二〇〇九年より事業が開始され、大学の女性教員比率を上げるための「採用推進」、学内教職員や学生に対する男女共同参画の「意識啓発と学習」、女性が子育てをしながら研究を継続していくための「環境整備」等が事業の主な取り組みとして掲げられていた。環境整備の中には、学内保育所の整備や女性専用の育児・休憩ルームの設置、子育てのために十分な時間確保ができない場合に支援員を配置する研究支援員制度があり、「女性のための相談室」はこの中に含まれていた。

学内には、保健管理センター、学生相談室、ハラスメント予防対策室が既に設置されており、相談内容に応じて紹介する協力関係が構築されていた。そうした状況の中で、二〇一〇年に新たに開始された「女性のための相談室」は、学内に所属する女性研究者を主な対象として、育児や介護と研究の両立、ワークライフバランスに関わる悩みの受け入れ先としての特徴を持ち、個人に対するカウンセリングのみならず、育児をする女性たちの相互交流の環境づくりや、教職員を対象とする心理研修も行った。相談日時は、

週三日、一〇時から一六時であった。

学生数一万人を超え、教員一三〇〇名を有する大学とはいえ、事業の趣旨に沿って相談対象となる理系女性研究者は、わずかと表現するに等しい人数であった。したがって、理系文系を問わず、女性研究者、女性職員そして修士課程以上の女子大学院生を相談対象とし、さらに女性に関わる問題の相談であれば、男性の相談も可とした。

六年間の相談件数は六一九件、相談内容の内訳は「仕事と家庭の両立情報」（一六％）、「プライベートな人間関係」（三八％）、「職場の人間関係」（一三％）、「コンサルテーション」（一九％）、「キャリア」（五％）、「その他」（一〇％）であった。「仕事と家庭の両立情報」には、子供が病気時の対応先、保育園、小学校選び、習い事、小学生の放課後の預け先など地域の情報を求める相談、「プライベートな人間関係」では婚姻関係にあるパートナーや交際相手に関すること、「職場の人間関係」では、研究室や職場の上司・同僚・部下との関係の相談が含まれる。「コンサルテーション」は、教員が指導学生の心理面の理解や対応についてアドバイスを求める内容である。女子大学院生の相談でよく見られたのが「キャリア」に関することであり、具体的には修士課程から博士課程に進学する際の不安、アカデミアの道を選んだ場合の結婚や出産といったライフプランへの影響などであった。「その他」には、職場環境や雇用問題等が含まれている。

相談利用者の七割が三〇～四〇代の子育て世代であり、大学院生の利用は一割であった。ちなみに、女子学生を指導する男性教員、女性を部下に持つ管理職男性からの相談も一割あったことを付け加えておく。

このように、学内において女性支援という名のもとに、かなり限定的な対象という中で相談活動を行ってきた。ご紹介したとおり、大学院生の相談は、それほど多くはなかったが、女子大学院生のワークライフバランスに相当する相談事例を紹介してみよう。

大学院生A子

A子は、自然科学系に所属する博士課程二年生（二七歳）である。同級生の夫は大学卒業後地方公務員に就職し、A子が修士課程在籍中に結婚。その後第一子を出産、一年間の休学を経て復学した。毎朝、家事をして保育園に子供を送ってから大学に向かい、帰宅後も一人で家事育児を担当する。家事・育児への夫の積極的な関わりはない。彼女の研究に対して夫は反対はしないが、自分に迷惑をかけない範囲なら良いという態度。自宅近くに住む両親は、多少手助けはしてくれるものの、どうしてそこまで研究の道に進もうとするのか不思議な様子で、家にいればいい、早く二人目を産んだらという雰囲気。土日に行う山でのフィールドワークにも、子供を背負って出かけている。将来は、できれば研究者の道に進みたいが、今のような生活では難し

いと感じる。体力も気力も失い、しんどさを感じ、どう両立したらいいのかわからなくなり来室した。

カウンセリングを通じて、A子と夫の関係は、A子がすべてを世話し、夫はそれに任せる「世話する—される」という依存関係にあることを指摘。固定化した役割による繋がりではなく、相互に助け合うような関係性を目指すよう伝えた。自分だけで家事や育児をするのではなく、その辛さや悩みを素直に夫に話し、助けを求めてはどうかとアドバイスした。家事・育児の分担は自分の負担が軽くなり、研究が進むメリットだけでなく、子供にとっても母親以外の大人と接触することが、精神的成長につながることも併せて伝えた。

相談室に来室するまで、A子は自分の悩みを夫や両親を含む家族の誰にも話していないことが分かってきた。A子が語ったことは、夫や両親に家事や育児を頼むのは迷惑なことに違いないという思い込みであって、本当にそうであるかは確証がないこと。そして何より、妻であり母親である自分が学生でいることに、罪悪感をもっていることも語られるようになった。

相談室でのアドバイスのあと、夫に自分の気持ちをありのまま伝えたところ、夫はA子に対して子育てに口をはさんではいけないように感じていたこと、自分は何をしてあげたらよいのかと彼自身も悩んでいたことが打ち明けられた。その後、両親とも話しあい、A子が夫に対して感じていた「自分に迷惑さえかけないなら」という態度は誤解に基づいていたことも判明。その後、彼女は夫や両親と家事や育児を分担し、数年後には学位を取得、二人目の子供も出産し、いまも好きな研究を続けている。

大学院生B子

B子は、アジアからの留学生で博士課程三年生の二八歳である。日本での研究生活は九年に及ぶ。母国に地理的にも近く、先輩の勧めもあり日本の大学を選んだ。友達と遊ぶことや恋愛を楽しむよりも研究が面白く、修士課程に進んでからは一日も休むことなく大学院で研究を続けていた。その努力の結果、昨年は六本の論文を書き卒業を早めようという話になっていた。ところが来室する半年前のある日、突然不安に襲われた。原因が明確でなく、ただ不安でその日から何もやる気が出なくなった。大学院には来てゼミには参加するが、博士論文は全く進んでいない。一週間前には、体調不良により入院し、一人ではどうしようもなくなり相談室を訪れた。

彼女の話は、なぜ一人で研究しているのか、この生活でいいのだろうか、自分の人生はこれでいいのかという漠然としたものであった。大学入学当時は、同郷の友達や先輩も在籍しており、寂しさは感じなかった。しかし、次第に仲間は、社会人になって働き始め、家族ができ、そして友達は母親になっていった。みんなと話が合わなくなって、

周りはみな楽しそうに生活しているようにみえる。けれど自分と同じような境遇の人がいない。女性で博士課程に進んだ人が日本人や同郷人にかかわらず近くにいない。もう研究もできる状態ではないし、寂しい。休学して母国に戻ろうかとも考えている。一体私はどうなってしまったのか。恋人はいらないけれど、家族がほしい、とぽつりぽつりと、時折涙を見せながら語っていた。

相談員は、彼女の悩みの根源が、女性のライフサイクルに基づくものだと理解し、B子にこう伝えた。一〇代の終わりからこれまでは、勉強と研究が中心の生活で、あなた自身のニーズと、周囲から求められることが一致していたから、特に問題を感じなかった。ところが、いまあなたは二〇代の後半になり、あなた以外の仲間たちは社会人として独立し、さらに結婚や出産といった家族を養うという人生の次のステージに進んだこと、周りに同じ境遇の女性がいないこともあって、自分が周りから切り離されたように感じているのではないか。そしておそらく、あなたのなかに研究以外のニーズが生まれたように感じることと、それはあなたの年齢では普通のことのように思うという趣旨のことを伝えた。

次のカウンセリングでは、B子は、前回とはまるで別人のような明るい表情で相談室を訪れ、自分が何で悩んでいるのかが分かったらすっきりしたと語りだした。今までそういう人は要らないと人にも言ってきたし。でも前回のカウンセリングで普通のことと言われてはっとした。自分のことなのに、自分が分からなかったが、もう大丈夫ですといって部屋を後にした。その後、同じ大学の留学生と交際することになったこと、翌年には学位を取得し無事修了できたこと、さらに彼と結婚したとの連絡もあった。

誰にとっての問題なのか？

大学院生で結婚・出産し、研究者を目指すA子と留学生B子のケースは、一般的ではないと思うかもしれないが、実はそうでもない。

戦争勃発から150年、
今までにない視点から
新しい戦争像に迫る！

戊辰戦争の新視点 全2冊

奈倉哲三・保谷　徹・箱石　大編
各2200円　「内容案内」送呈
518日にわたる内戦は、社会や人びとにいかなる影響を与えたのか？戊辰戦争研究の最前線へ誘う。
上 **世界・政治**　下 **軍事・民衆**

歴史研究と〈総合資料学〉
国立歴史民俗博物館編　分野を超えた共同研究が、新たな歴史学を切り拓く。　3200円

現代民俗学のフィールド
古家信平編　民俗学の現在と課題を論じる20編を収め、新たな地平を開く。　10000円

佐藤　信編 —— 各13000円

史料・史跡と古代社会
国家と社会を独自の角度から考察し、古代史の新知見を提示する。

律令制と古代国家
律令制と王権の展開を考察し、古代史の新たな視点を示す。

花押・印章図典
瀬野精一郎監修・吉川弘文館編集部編
花押約2000と印章約400を収録する。　【2刷】3300円

戦争とトラウマ
不可視化された日本兵の戦争神経症
中村江里著　なぜ戦後長らく忘却されてきたか。【2刷】4600円

日本メディア史年表
土屋礼子編　SNS・テレビ・新聞から映画・雑誌・ラジオまで。はじめての総合的年表！　6500円

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税別

A子の相談は、大学院で結婚したという点で稀なケースかもしれないが、キャリアアップを望みつつ、研究と家庭・育児の両立に悩んでいるという点では、当事業の支援対象とする女性研究者の典型的事例である。アドバイスを契機にA子は初めて自分の本当の気持ちを夫と両親に語り、家事や育児を家族と分担してもいいこと、彼女が研究を継続することについて、夫も両親も応援してくれていると感じることができた。また、自分が家事も育児もすべてを負担しなければならないという思い、さらに、きっと夫や両親はこう思っているに違いないという思い込み、女性は母親は「こうあるべき」という理想が自分自身を苦しめていることなど、さまざまな女性の相談に共通している点が多い。そして、子供や互いの人生について考えていることを最も大切なパートナーとそもそも話そうとさえしていないことも同様である。

はじめに、男子大学院生には「ない」が、女子大学院生にはワークライフバランスの問題が「ある」ことにひっかかると述べた。なぜなら、当然のように男子大学院生のそれは「ない」ものとして、そもそも意識されていないと思うからだ。常々、「女性の両立問題」という言葉にひっかかってきた。女性が赤ちゃんを抱っこして保育園に入れてほしいとプラカードをもって役所に押しかける保活がテレビで映し出される様に、私は違和感がある。あなたの夫はどこへいったのか、二人の問題ではないのかと問いかけたくなる。それは、両立問題が本来は女性だけの問題ではないにもかかわらず、女性自身もすんなり受け入れてしまっているように見えるからだ。その言葉には、家庭も仕事も、その二つのバランスを上手く保つことができないのも「女性次第」という意味合いが含まれていて、そのことを誰もが当たり前のこととして受け止めてしまっているように見える。巷にある時短のテクニック本を読みこなし、時短の電化製品を購入したとしても、大抵の場合それらをバランスよくこなすことは難しい。ましてや、人間関係においては、A子のように自分を追い込むか、夫を批判し、夫婦関係を悪化させるのが、私が見てきたところである。その末路の一つが、仕事が終わっても、家族の待つ自宅に足が向かない、いわゆる「フラリーマン」という居場所のなくなった男性たちの姿だろう。したがって、ワークライフバランスという問題が、男性に無関係の話ではなくむしろ自身の問題でもあるということを男性にも理解してもらいたいし、パートナー同士の共通した課題としてお互いに認識することが、その問題を乗り越えてゆく鍵であると私は信じている。

他方、B子の問題は、研究（ワーク）だけに専念していた日々に突然訪れた不安。これまで考えもしなかった自分の女性としての生き方（ライフ）に迷いが生じた事例である。いつしか二〇代後半になり、周りはライフサイクルの次のステージへと移り、自分だけが大学院生として学生生活を

過ごしていることへの取り残されたという感覚や、留学生であること、周囲に同じ境遇の人がいないといった孤独感に加えて、パートナーの不在などが絡み合い、またそれらの感覚を自身で明確に意識できないでいたことなどから、彼女は大きな不安に苛まれていた。研究だけの生活でいいのかという不安は女性だけのものではないが、一般的に男性より女性のほうが結婚年齢が早いことや、社会人ではなく、学生であるという状況は、女子大学院生のほうがこうした不安を抱きやすい状況にあろう。

何もできない半年の間、B子は、友人たちに自分の訳がわからない苦しさを訴え続けたが、特殊な環境にいる彼女の状況を理解できる人はいなかった。もしも、彼女の周囲に女性研究者が何名かいたならば、彼女の悩みに共感し、自分の体験を語り、あなただけではないと伝えたはずだろう。しかし、ご存じのように自然科学系分野の女性研究者は男性の研究者に比して、圧倒的に少ない状況である。

最後に、「女性の活躍」を成長戦略の柱に据える現政権の政策に見られるように、今後、日本の女性は、自身が望む望まないにかかわらず、よりいっそうの社会進出を求められてゆき、仕事と家庭の両立の問題がいま以上に顕在化していくものと思われる。そうだとすれば、まずは女性のみならず男性も学生時代に男女間のジェンダー役割やそれに関わる問題についてしっかりと学び、男女共に意識していくことが大切だろう。また、大学院生のワークライフバランスの問題は、まず、女性が家事や育児などのすべてを引き受けなければいけないという思い込みを乗り越えることが大切である。と同時に、夫やパートナーとの関係が断絶する前に、その大切な相手と自分がどう生きたいのか、それを成り立たせるために二人や家族にできることは何かを徹底的に話し続けること。そうすることによって、仕事と家事の両立に関わる現実的な負担だけではなく、心理的な負担を二人で、あるいは家族でシェアしてゆくことでしか解決に結びつく術はないと思われる。

［付記］

提示した事例は、個人が特定できないように、趣向を損ねないかぎりで変更を加えたものである。

特集＊大学院生は困っている！

奴隷解放いまだ——任期付研究者／ピペドたちの悲哀

榎木英介（近畿大学医学部臨床研究センター）

1　追い詰められた若手研究者たち

二〇一八年一月、衝撃的なニュースが報じられた。

ノーベル生理学・医学賞受賞者の山中伸弥教授が率いる京都大学のｉＰＳ細胞研究所（ＣｉＲＡ）に所属する三六歳の研究者が、論文のデータを加工し、存在しなかった有意差を出すという捏造を行ったことが明らかになったのだ。

残念ながら研究不正自体はもはやありふれたものであり、ＳＴＡＰ細胞をめぐる騒動をはじめ、様々な大学や研究機関で発生している。だから、もはや驚きに値するニュースではないのかもしれない。

しかし、研究不正防止対策に厳しい姿勢で取り組んでいたと思われていたＣｉＲＡで発生した事例であったため、世間の注目を集めた。その際、特に注目を集めたのが、研究不正を行った研究者の経歴だ。当該研究者は、私立大学の薬学部を卒業後大学院に進み、京都大学の大学院で博士の学位を取得した彼は、米国留学を経て、ＣｉＲＡに任期付助教として勤務していた。

当該研究者にとって二〇一八年は転機の年だった。任期と科研費（科学技術研究費補助金）は三月で切れる。また、博士号取得から八年が経過し、科研費の若手枠には応募できない。そんななか不正論文は大きな意味を持った。この論文により、日本医療研究開発機構（ＡＭＥＤ）から三〇〇〇万円の研究費を得ることができた。また、学会賞を取るなど注目を集め、任期の延長もしくはよりよい職を得る可能性が高まっていた。

こうした背景が研究不正を行う動機になったのかは、本人しか知り得ない。しかし、多くの人たちが、任期のついた不安定な職にいることが研究不正の背景にあったと言われ納得している。そりゃ研究不正を起こしたとしても不思

議ではないよなあ、と……。

このこと自体が、若手研究者が厳しい環境に置かれていることを示している。

2　ピペド（ピペット奴隷）と呼ばれる研究者たち

若手研究者、とくに生命科学の研究者たちの置かれた立場は極めて厳しい。

一九九一年の大学院の定員の倍増計画、一九九〇年代初頭から順次始まった大学院重点化、一九九六年の第一期科学技術基本計画に示されたポストドクター（ポスドク＝非正規雇用の若手研究者）等一万人計画により、博士号を取得した人の数は大きく増え、二〇〇〇年代初頭には新規の博士号取得者の数は一万五〇〇〇人に達していた。

二〇〇〇年以降も、国立大学の法人化、重点領域に対する研究予算のトップダウンの投資、国立大学の運営費交付金の年一％ずつの減額等により、研究現場の風景は激変した。数年間のプロジェクト研究費に対する依存度が増したため、研究費がある期間だけ実働する研究者を雇うことが常態化した。

すでに採用した教員のポストを任期付にはできないため、順次若手教員から任期付のポストになっていった。もはや四〇歳以下の若手教員の半数以上が任期付になった。もはや任期付の助教はポスドク並か、それ以上に厳しい職業だ。研究だけでなく教育その他の仕事があるなか業績を出さなければ生き残れない。

こうした状況に「余った博士」は好都合だった。

研究費がある期間だけ実働を担ってくれる任期付の研究者の存在は好都合。まさに雇用の調整弁。しかも潤沢に供給される。

とくに生命科学の研究は「手を動かしてナンボ」。実験を数多く行わなければ成果が出ない労働集約型の研究が多い。こうなると、雇用の継続や推薦状の交付等をたてに任期付の研究者に高圧的に研究を強要するスタイルが、成果を出すためにもっとも適した体制となる。

憎しみに抗って
不純なものへの賛歌
エムケ　分極化する世界で高まる他者への憎しみとは。難民政策に揺れるドイツ発、いまを読む必読の書。**浅井晶子訳 ¥3600**

沖縄 憲法なき戦後
講和条約三条と日本の安全保障
古関彰一・豊下楢彦　日米両国の思惑により無憲法状態の中で「基地の島」は築かれた。外交史と憲法の双方向から解く。**¥3400**

外地巡礼
「越境的」日本語文学論
西成彦　佐藤春夫からリービ英雄へ。旧植民地、北海道・沖縄、海外移住地を舞台に織りなされた「東アジア」移動文学論。**¥4200**

知性改善論／短論文
スピノザ　哲学の動機と方法、神、人間とそのさいわいについての初期著作二篇。半世紀ぶりに新訳・詳注。**佐藤一郎訳¥7800**

模範像なしに
美学小論集
アドルノ　音楽、映画、建築など現代アートの批判的擁護から幼年時代の回想まで。晩年の思考のエッセンス。**竹峰義和訳 ¥4500**

情報リテラシーのための図書館
日本の教育制度と図書館の改革
根本彰　図書館の社会的役割を社会・文化史から再考し、情報テクノロジー教育の場となるこれからの図書館像を論じる。**¥2700**

廣松渉の思想
内在のダイナミズム
渡辺恭彦　1960年代以後の思想・哲学に大きな影響力を与えた一哲学者の、人と思想と時代と影響関係の全体を描く。**¥5800**

東京文京本郷2丁目20-7　**みすず書房**
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税別）
www.msz.co.jp

研究成果を出すことを強く求められる側の任期付研究者にとって選択肢は少ない。とくに生命科学の分野では、二〇〇〇年代に関連の学部、大学が多く作られたが、輩出された人たちを雇用する産業はまだ育っていない。製薬企業を含めた生命科学の産業は、全てを合わせてもトヨタ自動車一社の売り上げに満たない。

また、新卒一括採用に代表される年功序列、終身雇用の雇用環境がまだ残っており、たとえば研究不正を行った京大研究者と同じ三六歳の任期付研究者を雇用することは簡単ではない。応募要項に年齢制限がある会社や組織は多い。たとえ雇われたとしても、三六歳の水準の給料を払う必要があるが、社内では新人であり、仕事に慣れるのに時間がかかる。高い給料をもらっているわりにパフォーマンスが悪い、つまり「使えない」という烙印を押されてしまう。

かといって研究の世界でやっていくにも、研究者が多すぎるため、一つの常勤雇用の教授、准教授のポストに一〇〇人から多いときでは三〇〇人もの応募者が殺到することがある。このような倍率を勝ち抜くのは、もはや競争というよりクジ引きと言わざるをえない。だから延々と有期雇用の職を繰り返さざるをえない。

そうなると、雇用者の理不尽で高圧的な要求にも従わざるをえない。まさに雇用を盾に奴隷のように働かされているわけだ。土日祝日の出勤を強要する研究室がアカデミック・ハラスメント事例としてメディアで報道されることがあるが、氷山の一角だろう。

研究を強要された研究者を「ピペド」と揶揄する声がある。生命科学の研究で多用されるマイクロピペットという少量の液体を出し入れする道具を握り続け、理不尽な要求に答えざるをえない奴隷のような存在というわけだ。

知人の有期雇用で雇われている研究者に、給料は安くて良い、とにかく無期雇用の職に就きたいんだと力説されたことがある。不安定な状況がいかに心理的に厳しい状況かを如実に表す言葉だと言えよう。

ノーベル賞受賞者が受賞対象になった研究を行なった年代は、三〇代から四〇代前半と言われる。このように、最も才能溢れる年代を、不安定でかつ奴隷のような環境で過ごさざるをえない研究者が多い現状では、日本の研究レベルが下降の一途を辿るのは宜なるかなと言わざるをえない。

3　抵抗勢力は教員

二〇〇〇年代後半以降、若手研究者を取り巻く厳しい状況をなんとかしなければならないという声が高まった。ある種博士号取得者を増やし、この問題の原因を作ったと言わざるをえない文部科学省も、二〇〇八年から一〇年間、ポストドクターを大学や研究機関だけでなく、社会の様々な場に活路を見出してもらうための取り組みを行った。

文科省のポストドクター・キャリア事業は、大学や研究機関を選定し、その機関に博士号取得者やポストドクター

に対し、座学の講義やインターンシップなどを行う。これにより、博士号取得者に大学や研究所だけでなく、民間企業や官公庁、NPOなど様々な場所に活躍の道を見つけ出してもらうというものだ。一〇年間で旧帝大をはじめ、様々な大学、研究所が採択され、取り組みを行った。私はこの事業の評価委員であったため、各大学等の取り組みを見てきた。北海道大学、名古屋大学、大阪府立大学など、成功事例もあった。

上記の大学では、産業界を熟知する担当者を雇用し、地元を中心とする民間企業などを熱心に訪問し、インターンシップに協力してくれる企業を開拓した。そして、博士号取得者などの人材の持つ能力と、民間企業のニーズをマッチングさせるための丁寧な取り組みを行った。また、博士号取得者、教員、そして博士号取得者に「頭が硬い」などの偏見を持つ企業の考えを変えるために、カウンセリングや丁寧な説明などを行い、それぞれの考えを解きほぐしていった。

こうした地を這うような努力により、今まで博士号取得者を採用したことがなかった企業や、新しい分野に参入しようとする企業や団体が博士号取得者を採用するなどの成果があった。博士課程の学生やポスドクも、様々な分野に活躍の場があることを知ることができ、視野を広げることができた。そして教員も、学生が多様な分野で活躍することの重要性を理解することができた。

ただ、こうしたウイン－ウインの例ばかりではなかった。規模の大きな大学では、ポスドクの人数すら把握していない例もあった。また、学部間のコミュニケーションが取れず、一部の学部、研究科所属の学生しか集めることができなかった大学もあった。上層部の理解が得られず、担当者が十分な能力を発揮できなかったり、担当者が民間企業などの大学の外のことを知らずに、方向違いの取り組みをしたところもあった。

そして、いずれの取り組みも、最大の問題点は教員の意識改革であった。座学の講義や企業などにインターンシッ

新刊案内

永野善子 編著
《神奈川大学人文学研究叢書40》
帝国とナショナリズムの言説空間
——国際比較と相互連携
本体四六〇〇円
帝国論とナショナリズム論の国際比較及び各地域間の連携について、国際関係論・歴史学・人類学・経済学・地域研究からの学際的分析。

ボブ・ジェソップ 著／中谷義和 監訳・加藤雅俊・進藤兵・高嶋正晴 訳
国家：過去、現在、未来
本体七〇〇〇円
利潤志向的で市場媒介型の資本蓄積の踏み車を回し続けざるを得ない世界を変えるための、政治的実践の基礎を提示する最新の論文集。

白水繁彦 著
海外ウチナーンチュ活動家の誕生
——民族文化主義の実践
A5判・二六〇頁・本体四八〇〇円
ハワイとロサンゼルスにおける沖縄系文化の維持・継承・発展を意図する運動を調査し、エスニック・コミュニティ活動家の「アイディア」とその獲得の過程、実践の実態を明らかにする。

前田啓一 著
ベトナム中小企業の誕生
A5判・二五六頁・本体四〇〇〇円
遅れて登場したベトナムの創業者は最初から経済自由化の荒波に翻弄され続けている。進出日系企業の存立とベトナム地場企業の勃興。

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://rr2.ochanomizushobo.co.jp/

プに行けば、それだけ研究の進捗が遅れてしまうとして、学生やポスドクをこの事業に参加させない研究室も多かった。また、大学院の目的は研究者を生み出すことであるという考えに固執し、こうした取り組みに全く理解を示さない教員もいた。多少の違いはあれども、どの大学でも、三割前後の教員は考えを改めなかったという。

こうした教員の存在は、学生やポスドクを労働力としてしかみていないことの何よりの証拠だ。研究の実働を担う学生やポスドクに、自らのキャリアを追求するという「知恵」を授けてもらったら困るのだ。成果が出るまで働いてもらい、いらなくなったら切れる存在がいなくなっては困るのだ。

4　立ち去る若手たち

よくポスドク問題、若手研究者問題の原因は文科省だという人がいる。たしかに政策のミスは指摘せざるをえない。大学院倍増計画が立案された一九九一年は、すでにバブル経済が崩壊していたが、その直前の予想では理工系を中心とする高度人材が将来供給不足に陥るという予測があった。しかし、一九九〇年代半ばには、すでに人材が供給過剰になるという予測があったにも関わらず、この方針は変わることはなかった。一度増やした定員を簡単には減らせないということだろうが、どこかで方向転換はできなかったのか。

ポスドク一万人計画は、無給のオーバードクター（博士号を取得するか博士課程在学中で職がない者）を救済する意味合いがあったと言えるが、プロジェクト型の研究が増え、ポスドクを雇用しないと研究が回らない体制が出来上がった。武者修行の場として必要、産業を起こす可能性があるなど、聞こえがいいが根拠に乏しい期待が撤回されることはなく、四〇〇〇名前後と言われたオーバードクターをはるかに凌駕する数のポスドクのポストが用意された。これも撤回されることはなかった。

しかし、文科省ばかりに責任を押し付けることはできない。こうした状況に適応し、ポスドクを使い勝手のよい労働力として利用してきた大学教員にも責任は大いにある。上述のように、自分の部下や学生のキャリアに対し冷淡な教員は依然として存在し続けている。若手研究者のキャリアを真剣に考えるような研究者は、若手をピペドとして使って論文を量産する研究者に敗れたため、大学にはこうした研究者たちが少ないのかもしれない。いずれにせよ、大学教員の側から、ピペドたちの奴隷解放を積極的に行う姿勢はみえない。

成果をあげて厳しい競争を勝ち抜いてきた教員たちにしてみれば、ピペドの地位に甘んじているのは、単純に成果を出していないからに過ぎないとみえる。スポーツだろうが芸術、芸能だろうが、成功できるのは一握り。けれど、誰も助けてくれとは言わない。どうして研究者だけが競争

に敗れた者のキャリアの面倒を見なければならないのか……すべては「自己責任」であるという教員も少なくない。

しかし、今大学は「自己責任」のしっぺ返しを食らっている。二〇〇〇年代半ばくらいから、修士課程修了者の博士課程進学率が低下をし続けているのだ。大学教員は誰しも、優秀な学生ほど博士課程に来ないというボヤキのひとつを吐いたことがあるだろう。けれどそれは、学生たちが上の世代をみて、博士課程に進学しても得はないと「自己責任」で判断したからであり、まさに大学教員たちが若手研究者のキャリアに冷淡な姿勢を見せ続けたことが生み出したものだ。

「立ち去り型サボタージュ」という言葉がある。過酷な医療現場で燃え尽き、ひっそりと辞めていく医師たちの行動を指した言葉だが、研究の現場でも「立ち去り型サボタージュ」が起きていると言えるだろう。

5　奴隷解放にむけて

学位、就職の斡旋、論文、研究費その他で手足を縛られ、逃げ場のないピペドたち。外からの圧力も、教授の自治権のなかに囲い込まれ届かない。この絶望的な状況から、ピペドを解放することはできるのか。

まずは隔離されたポスドクに情報を与えなければならない。自らの置かれた状況がいかに搾取的であり、おかしいか、知ってもらうことから始めるべきだ。

これは困難な作業だ。学内で開かれている講義にさえ出席が許されない状況では、情報を届けることは難しい。また、私生活を含めて管理されている状況では、インターネットを含め、外からの情報も入らない。しかし、門戸は開いておきたい。隔離された空間から出てきたときに、手の届く範囲に情報の窓口を用意しておきたい。

そのためには情報のワンストップ化を目指したい。ポスドクや若手研究者が情報を得たいと思っても、どこを見ればよいか分からないのが現状だ。大学内のキャリア関係の事業も、複数の事業が行われており、はっきりしない場合がある。

このため、若手研究者のキャリア情報ならここ、という一元的なウェブサイトをまずは作るべきだ。それもまだないというこの現状が情けないが、まずはその立ち位置をしっかり認識する必要がある。

これを誰がやるかが問題だ。文科省がやれ、という声もあるし、実際私も文科省の担当者に言ったこともあるが、今は考えを改めた。これは科学コミュニティが自分の責任として行うべきことなのだ。

学協会単位でもできることがあるだろうが、学協会の集合である日本学術会議がやってほしい。しかし、日本学術会議は予算がない、権限がないというばかりで、さらさらやる気がない。結局関心を持つ人たちが自らの手で行うしかない。

若手の隔離も取り払わなければならない。現在研究室は一つの中小企業のように機能しているため、人事や学位を盾に所属員を囲い込めるようになっている。それを学問の自由、自律と言ってしまえばそれまでだが、その弊害がピペドとして現れている。これを改善するためには、若手の所属や評価を名実ともに複数にする必要がある。

若手研究者のキャリア開発に熱心な大学を評価し、学生やポスドクの進路選択の際の参考にすることも必要だ。これは不熱心な大学には人が集まらないようにして、改革を促すということでもある。黙っていても学生やポスドクが集まる東大や京大には効き目がないだろうが、中小規模の大学にとっては人材獲得のための目玉にもなりうる。

そして、困難を伴うものの、科学コミュニティの構造も変えられたら変えたい。脳科学の研究者の有志は、「競争性と安定性を担保する日本版テニュアトラック制度」を提案している。これはいわば「スリーアウトチェンジ」のシステムだ。若手研究者には少なくとも三回まではポスドクを継続するチャンスを与え、研究成果を競争させる。そのかわり、その間は雇用は安定させる。三回目のポスドクで成果が出なくても、研究支援、研究管理部門も含めた多様な職に移ることによって、配置転換を行う。いわば科学アカデミー全体を一つの会社のように機能させるのだ。これにより、若手研究者を研究室という閉じた世界のみならず、より上位の科学コミュニティに所属させることによって、若手研究者を囲い込みから解放することもできる。

類似の提案は複数ある。しかし、現状では提案に留まっており、実行される気配はない。それもそうだろう。潤沢に若手研究者を使い捨てられるシステムは、現状の研究を維持するために都合がよいからだ。このままでは、近く来ると言われる日本の財政破綻に期待するしかないのだろうか。「ガラガラポン」でしか現状を変えられないとしたら、悲しいことだ。

科学研究の現場ではパブリッシュ・オア・ペリッシュという言葉が囁かれる。論文を書き続けなければ研究者としては滅びる、という言葉だ。しかしこの二〇年間若手研究者の未来を食いつぶしてまでパブリッシュにこだわり続けてきた日本の研究環境は、すでにペリッシュしかかっていると言わざるを得ない。完全に滅びる前に、財政破綻後の復活のために、日本の大学、科学コミュニティが何を優先し、何を未来に残すべきか、関係者は自らのこととして真剣に考えるときに来ていると言えるだろう。

特集＊大学院生は困っている！

今、起きているアカデミック・ハラスメントを何とかしよう

北仲千里（広島大学ハラスメント相談室）

筆者は大学で専任のハラスメント相談員の仕事をしており、また全国団体の関係者からも日々ハラスメント問題の話を聞いているが、いつも、大学の先生について世間が抱くイメージと現実とのギャップについて考えてしまう。ハラスメントの背景として学生の基礎的な知力が低下した、学生の消費者意識が高まった、世界的な研究競争へのプレッシャーが強くなった、大学教員がどんどん忙しくなっている……などなど様々な理由や議論はあるだろう。しかし、某人材派遣会社の「上司に困ったら、オー×××」のCMではないが、誰だって、アブナい先生やブラック研究室から、どんどん逃げ出してよいはずだ。しかし、実際にはアカデミック・ハラスメントからは、なかなか抜け出しにくい。職場のパワハラに見られるように、どこの世界にも、コミュニケーションの相手を傷つけてしまう人や、一緒に仕事をしていくのがとても難しい人はいるし、常識から外れた極端なルールや違法行為が当然のようにまかり通る「ブラックな職場」もあるだろう。ただ、大学・研究の世界のアカデミック・ハラスメントの場合には、大学社会ならではの特殊な事情がある。まずはそれらのケースを見ていこう。

教員への「尊敬」、社会的地位への幻想、ネグレクト

大学の教員と学生は教育―指導関係にあるため、学生の側に「先生の言うこと、していることは正しいはず」という思い込みがまずある。まじめな学生ほど、その先生は立派な、他人に教授すべき知識や見識を持っているに違いなく、学生が批判するなんて失礼だと思っていたりする。特に文系では、まるで宗教指導者と信者の関係のように、教員を心から慕い、彼らの言葉を絶対的なものとしてありがたくいただくという関係性さえも時には作られる。それは、

教室でのマスに対する講義よりも、大学院の専門的な指導関係、一対一の研究指導に入ってからの方が起きやすくなる。また、大学教授という立場の持つ社会的影響力、権力のようなものをひどく恐れて、異議を唱えることができない学生もいる。そうした影響力は、その学生の考えすぎである場合も多分にあるが、大学院生や若手研究者など、その学会で今後生きていきたいと考える人にとっては、実際、リスクもある。

「なぜ、この課題をやらなければいけないのかわからない」という指導を無理強いされることは、誰にとっても苦痛だろう。そこで立ち止まってしまって課題を提出できなくなったり、逆に従順に徹夜で指示をこなそうと無理をして体を壊してしまう学生もいる。セクハラにノーと言えずに黙って耐える学生もいる。そして多くの場合、研究室に行けなくなったり、自ら退学するという形での脱出となる。教員の方は、「あの学生は出来が悪かった」「あの学生は根性がなかった、メンタルが弱かった」「あの学生は研究室になじまなかった」などと周囲に説明し、教員の側の問題は指摘されない。けれども、毎年のように休学者や退学者が出ている研究室には、何か根本的な問題があるとみるべきなのだ。

教員に対して、さらに異議を唱えにくいのは、教員側の能動的なハラスメントではなく、「ちゃんと指導しない」「言うことがくるくる変わる」などの消極的な行為として起きた時だ。私たち（ハラスメント相談員）は、これを「ネグレクト」と呼ぶ。研究や大学での雑務、さらに学外の様々な仕事で慌ただしい大学教員は今日どこにでもいるし、首をかしげたくなるほど多数の学生の指導を引き受けている教員もいる。そのような状況で、学生が教員に研究計画や論文の草稿についての相談、推薦のお願いなどを依頼しても、長い間返答を得られない。このことはその学生の研究計画や卒業、進路決定などに大きな影響をもたらし、場合によっては経済的な負担もかかるため、かなり深刻な被害をもたらすのだが、教員の方にあまり自覚がないというケースも見受けられる。また、何時間も学生や若手研究者を拘束して説教や自慢話を聞かせる教員がいる一方で、学生とその研究について、十分な時間（たとえば一時間でも）を割いて話をしない、という教員もいるのだ。そういう場合、学生が研究について抱いている疑問や、学生なりに考えた研究の道筋、思いなどは、教員に受けとめられることはないだろう。また海外からの留学生の場合、本人が日本語が不得手で、教員もまた外国語がそれほど流暢でない場合、研究についての相談がきちんとできず、教員と学生相互の考えや意図を充分に共有できないといった危険性もある。

「精神的マウンティング」や「おいつめ」

大学の教員や、芸術の指導者など、「師」と呼ばれる立

場の人たちの中には、師として尊敬されたい、立ててもらいたいと考える人もいる。自然に心からの尊敬を集める師であればよいのだが、中には、自身への尊敬の念を表明するよう要求する教員がいることもまた事実である。こういったケースを私たちは「精神的マウンティング」と呼んでいる。さらに、尊敬の念の表明に留まらず、謝礼金の支払いや、書籍購入、講演会のチケットの購入を求められるといったケースも存在する。当然のことながら、研究者への尊敬の念は強制的には生み出せないものであり、このような場合、無理をして尊敬しているふりをするしかない。しかし、尊敬の念を示さない弟子に対して嫌がらせをする教員もまた存在するのだ。

また、師の中には弟子を自分色に染めたいと思う人もいる。そうすることで、弟子の自主性、創造性を潰してしまう危険性もある。特に文系の場合、指導教員が「誰々の本など読むんじゃない」と命じ、学生が書いた資料や原稿を真っ赤に添削してほとんど書き換えてしまうケースなども存在する。あるいは、熱心といえば熱心なのだが、例えば夜中であっても学生に電話をかけて指示したり、休日でも「今すぐ研究室に来い」と呼びつけたり、学生のプライベートを無視し、時間を拘束するなどの行き過ぎた指導で学生を疲弊、困惑させてしまうケースもある。こうした師弟間の理不尽な関係性であっても、学生が逆らわずに従ってしまうことによって、知らず知らずのうちに、それがその研究室における「伝統」となり、後輩にもその関係性が維持されてしまう。そうなると、後輩の学生は、「学問の世界とはそういうものなんだ」「先生を立てて、常に尊敬を示すのが当たり前なんだ」と思い込み、この理不尽な関係性から抜けだすことができなくなってしまうのである。しかし、本来学問とは、建設的な批判や複眼的な思考、対等なディスカッションなどを通して発展させてゆくべきものであるから、学問の世界がこうした従順な師弟関係の作法で固定化されることは、学問の発展を阻害する重大な問題だと捉えるべきである。

藤原書店

明治の光 内村鑑三
新保祐司 キリスト教という「薬」抜きに西洋文明という「毒」を移植した日本近代が、根柢的に抱える欠落とは何か？ 3600円

胡 適 1891-1962
中国革命の中のリベラリズム
J・グリーダー 中国史上最高のリベラリストの決定版評伝。中国で今甦る。 佐藤公彦訳 8000円

知の総合をめざして
歴史学者シャルチエとの対話
P・ブルデュー 学問領域を超えて語る、最高の入門書。 加藤晴久・倉方健作編訳=解説 3600円

「戦争責任」はどこにあるのか
アメリカ外交政策の検証 1924-40
Ch・A・ビーアド 20世紀米最高の現代史家が終戦直後に出版した名著。開米潤・丸茂恭子訳 5500円

別冊『環』23
江戸―明治 連続する歴史
浪川健治・古家信平編 従来の江戸―明治断絶史観を根底から批判する新しい日本史を提示。3800円

金時鐘コレクション 発刊
全12巻（隔月配本） 内容見本呈
推薦=高銀・鶴見俊輔・吉増剛造・金石範・辻井喬・佐伯一麦・四方田犬彦・鵜飼哲
2 幻の詩集、復元にむけて
詩集『日本風土記』『日本風土記Ⅱ』
出版かなわず散逸した『日本風土記Ⅱ』を復元した待望作！著者語り下ろしインタビュー収録。 ［第1回配本］2800円

月刊 機 B6変32頁 2月号 №311
木村汎／西宮紘／飯塚数人／河内隆弥／河津聖恵／チャオ埴原三鈴／平川祐弘／大城立裕／加藤晴久／中西進／中村桂子／槇佐知子 ほか
年間購読料2000円（送料込） ◎見本誌・ブックガイド呈 ＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL 03-5272-0301
ホームページhttp://www.fujiwara-shoten.co.jp/

「研究室」の権力関係
――チームでの運命共同体、教授の権力

理系の研究室では、文系のように一対一の研究指導体制のなかでの師への個人的帰依のような関係性はあまり見受けられないようだが、一方で、理系は研究をチームで行い、多くの場合、複数の共著のかたちで研究成果を公表するため、万一そのチームから外れてしまうと研究自体ができなくなるリスクがある。その研究室が、競争へのプレッシャーが激しく、長時間の作業を当たり前とする雰囲気だと学生もそれに合わせざるをえないだろう。また、研究成果を共著で発表するために、個人の成果の帰属が曖昧になり、時には自らのアイデアや作業した成果を盗られるといったケースもある。また、誰かが研究不正やミスをすれば、自身はその不正やミスに関わっていなくても、運命共同体であるために巻き込まれてしまう。

さらに、理系の研究室の中には、小講座制で、教員の中でも特に教授に権限が集中するケースが多々ある（学部や大学によって多種多様ではあるが）。そのような研究室では個人の研究の自主性が認められなかったり、研究費そのものが「大鍋」にまとめられていて、教授の許可がないと使えない、教授が部下の研究者が取ってきた外部資金を使ってしまうといったケースも発生する。

他人は口を出すべからず？

文系、理系問わず、大学教員の間によくあるのは、「他の研究室のやり方には口を出さない」という態度である。これは、互いの学問研究の自由を侵さないためのある種の掟であって、一概に否定すべきものではない。しかし、そのことにより、隣の研究室のブラック度にまったく気づかなかったり、休学者や退学、退職者が出ても誰も介入しないといった組織の改善に消極的な土壌を生むことに繋がるのである。また、拙書（『アカデミック・ハラスメントの解決』）でも記したが、個々の大学教員はほとんど独立の自営業者のような形なので、学部長や研究科長が、各研究室の組織運営に口を出しにくい状況があることもまた問題を難しくしている。

とはいえ、こういった状況を放置するわけにいかないのは当然である。さまざまなアカデミック・ハラスメントの被害を受けて苦しむ学生を泣き寝入りさせるわけにはいかない。また、そのような状況を放置すれば、やがて重大事件に繋がるリスクをみすみす放置したことと同義である。したがって、大学は、個々の教員に研究業績のみを求めるのではなく、学生に対する教育指導のクオリティ管理を組織として徹底すべきだろう。そうしないかぎり、社会からの大学への期待、信頼を裏切ることになってしまう。

ハラスメントを避け、解決するには

ハラスメント対策として、教員に対して、個々人の認識を高めるための講演形式の研修や、DVDやe-learningでの研修を行うケースもあるが、それだけでは十分とはいえない。ハラスメント対策は、大学組織として大学にあってはならない事態にどう対処するか、という個人のレベルを超えた問題である。大学でハラスメントがなくならないのは、先述のように、誰も口を出さず、批判もせず、見て見ぬふりをすることに原因がある。したがって、重要なのは、組織として問題をコントロールすることにある。まずは教員同士（特に教授どうし）の日常的な相互批判もなされるべきだし、場合によっては懲戒処分もなされるべきであろう。その懲戒の際に、「あなたのやったことはどういうところが、なぜ問題なのか」を管理職が、心を込めて説諭することが重要である。

組織として取り組むべきこと

二〇〇〇年前後に大学のセクシュアル・ハラスメント対策が導入され始めた頃、「ハラスメント対策」とは、窓口に訴えてもらい、事実を調査して、処分をすることだ、と捉えられていることが多かった。その問題点は、「訴える」ことは大がかりなしくみであって相談者が選択しにくいこと、また「処分すれば終わり」と捉えられてしまい、本来、最も大切なはずの被害者救済がきちんとなされなかったことにある。

また、ハラスメントで困っている学生にとって、自身の指導教員を「訴える」のは、かなりハードルが高いことだ。多くの場合、被害者は「処罰などは望みません、だけど、つらい」と言う。そうであるならば、問題が大きくなる前に、小さな悩みの段階から気軽に相談ができて、被害を拡大させないように柔軟に対応していく方策を考えるべきだろう。学生が、研究や希望の進路を諦めてしまう前に、指

日本評論社
創業100年記念出版
歴史的名著を記念復刊！
末弘嚴太郎
【新装版】法学入門
法を学ぶ者の心得を、軽妙な語り口で説く法学入門書の決定版。■2200円＋税
【新装版】嘘の効用
法学に内在する様々な根本問題を平易に、しかし鋭く解説した名著。■2400円＋税
ミクロ経済学
伊藤元重［著］［第3版］
もっともわかりやすく、かつ、標準的なミクロ経済学がしっかり身につくテキストとして評価を確立した「伊藤ミクロ」の改訂版。行動経済学などミクロ経済学における新しい動向も紹介。■3,000円＋税
経済学者が贈る
未来への羅針盤■1,000円＋税
経済セミナー編集部［編］
現在の経済学は、将来世代に対して何が言えるのか？ できるのか？ 森棟公夫／吉川 洋／金本良嗣／矢野 誠 ほか
数学ガイダンス2018■数学セミナー増刊
大学数学への完全ガイド
数学セミナー編集部［編］
大学学部までに学ぶ数学の分野紹介をはじめ、学ぶ上での心構え、セミナーやレポートのこと、オススメの本など、新入生がすぐに知りたい情報を盛りだくさんでお届けします！
●［巻頭インタビュー］数学出身のプロ棋士・広瀬章人八段が語る■1,700円＋税
日本評論社
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎03-3987-8621 https://www.nippyo.co.jp/

導教員を交代したり、研究室の空間を分けるといった具体的な解決策を見出すことによって、「訴え、事実調査を行い、懲戒処分する」ほどの大事件になる前に、学生を「救いだす」ことができる方がよい。起きてしまった重大事案を調査するのではなく、今、起きている事態をどう解決するか、あるいはそういった事態が起こらないように過去の事案なども参照しながら、さまざまなハラスメントをいかに予防していくかという視点がとても大切なのである。それは、制度設計の問題でもあるが、制度などなくともともと実行している大学も多いわけで、結局は管理職やハラスメント委員などの取り組み方次第で変わるのである。

筆者のような「専門のハラスメント相談員」を置かないとまずいだろうかという問いあわせをしばしば受ける。大規模大学、研究中心の大学では、専門の相談員がいた方がよいとは思う。しかし、すべての大学にそれを求めるのは現実的ではない。大学の教職員だけでアカハラに取り組むにしても、まず、今起きている事案に柔軟に対応し、解決する、という方法を採ってもらいたい。また、学外の助言者（弁護士など）を確保しておくことも大切である。

日本では、「相談と支援」という仕事の専門性がまだまだよく理解されていない。しばしば誤解されるのだが、ハラスメント相談員の仕事は、心理カウンセラーではない。心理カウンセリングは支援内容の一部でしかなく、相談員がすべき働きは、問題の性質を把握し、現在の大学内外の制度や機関を活用して、被害当事者が困っている問題を解決するためのソーシャルワークである。一番良くないのは、教職員が兼任する「ハラスメント相談窓口」が、被害当事者の訴え（苦情）の「受付」のみの役割しか果たさずに、相談者の気持ちを受け止めもせず、助言もしない、そして解決に向けて具体的な対策を講じないようなシステムだ。

また、今日、多くの大学で研究不正の告発の仕組みとハラスメント相談の仕組みが別個に設けられているが、実際にはハラスメントと研究不正は相互に絡み合って生じるケースが多いため、別個に調査するのは不都合である。また、研究不正についても、訴え、それを処罰するといった制度ではなく、問題が起きそうな初期段階で、研究者の相談に乗りやすい予防的な組織を設置し、最悪の事態を避けるような相談・助言・介入などのシステムを設けるべきではないだろうか。ただ、実際には、学問分野の差異が大きく、他分野の研究不正を調査し助言することはハードルが高いため、大学を超えた第三者機関の設置についても検討すべきではないかと考える。

追記

なお、ここに記した〝実情〟は、必ずしも筆者の勤務先の機関で起こっていることではなく、私が見聞きした全国の複数の大学の状況を踏まえたものであると理解していただきたい。

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

「築地本マルシェ」に参加して

寒風の抜ける二月中旬、都内汐留で「読書の楽しみが見つかる2日間」と題して開かれた朝日新聞社企画の「築地本マルシェ」に大学出版部協会も参加した。この催事の特色は「厳選した本を読者謝恩価格で販売」することに加え、読書の魅力を発信するさまざまなトークイベントが用意されていたことだ。会場を三つに仕切って、一つは出版社の展示ブースとして、あとは三百席と五十席の（いずれもその一・五倍のキャパが見込めそうだったが）イベントスペースである。ここで二日間にわたって一〇以上の講演や対談、昨今読書好きに認知度を増しているビブリオバトル（書評合戦）などが行われたのである。協会では書籍展示のほか、京都大学学術出版会・鈴木哲也氏が中心になって「鼎談　学術書を読む―専門を超えた知を育む」を企画した。鈴木氏にその意図や当日の様子を聞いてみた。

「いま人間から主体的に物事を考える力が奪われていないかという強い問題意識があって、「学術書を読む」という社会的意味を問うというのが、今回の企画意図でした。会場では八〇人近い人が熱心にメモをとりながら聞いていただけました。本来まとまった体系としてあるべき知識が、「情報」として断片化され、咀嚼の必要のない流動食のようにきわめて緩い形で出回っている（農業環境技術研究所上席研究員／三中信宏氏）。なぜ知的な事柄を学ぶのか、その内在的な要求を大事にすべきではないのか（春秋社／三浦衛氏）。といった話は、とかく外在的な評価（学歴や研究者／研究機関の〈格〉）に振り回されがちな現代に、生き方の問題としての知という視角から警鐘を鳴らしたのではないでしょうか」

近頃こうした読書の意味を問いかけるトークイベントがよく見られる。ある県では八年前から高校図書館の司書が思い思いの本を選んで、順位をつけてイチオシ本として高校生に薦めている。後で司書と高校生たちが本をテーマに公開の場で討論するのだという。この種のイベントは、インターネットとＩＴで世界の書き換えがすすんでいると言われる今、いずれ聴者ゼロ・全体参加型になるのではないかと想像する。出版はマスメディアであり、前世紀に印刷と電波によってメディアは拡大していったが、いま広大なデジタル空間ではミニマムが可能になり、パーソナル化が進行している。出版においてはそれがどのように現れる、のかどうか、そこを考えてみたい。

北海道大学出版会

▼中村睦男著『**アイヌ民族法制と憲法**』（A5判・三七八頁・三八〇〇円）長年アイヌ文化振興法の制定に関わってきた著者が、北海道旧土人保護法の制定からアイヌ文化振興法に至るまでの過程を詳細に解説。先住民法制をめぐる憲法問題の論点も提示する。

▼岩下明裕編著『**ボーダーツーリズム―観光で地域をつくる**』（四六判・二七〇頁・二四〇〇円）国境や境界を資源と捉え、観光で地域の発展や振興を展望する、境界研究者たちの試み。実際に行ったツアーの成功例や失敗談を興味深く綴る。

▼大塚宜明著『**日本列島におけるナイフ形石器文化の生成―現生人類の移住と定着**』（B5判・三八八頁・一二〇〇〇円）ナイフ形石器の技術的多様性の地域的差異から、日本列島における人類の移住と定着の過程を明らかにする。

▼郭莉莉著『**日中の少子高齢化と福祉レジーム―育児支援と高齢者扶養・介護**』（A5判・二九〇頁・五八〇〇円）福祉系NPOや中国の「社区」など多様な主体が参与するケア領域に焦点を当て論じ、日中の福祉レジームを比較検討する。

弘前大学出版会

▼吉川孝・横地徳広・池田喬編著『**生きることに責任はあるのか―現象学的倫理学への試み**』（四六判・三〇八頁・二五〇〇円）奇妙な書名かもしれない。日々の生活に追われるなか、思い浮かぶことのない問いであろう。しかし、この問いを私たちから投げかけうる人びとがいる。哲学者たちのことである。本書では、彼らに〈生と責任〉をめぐる倫理学的思考の消息をたずねた。

▼持田睦・横地徳広編著『**戦うことに意味はあるのか―倫理学的横断への試み**』（四六判・三八四頁・二八〇〇円）この世界に生まれ落ちたのは、誰にとっても偶さかのことである。他でもありえたのに、なぜかこうして生きる私たちがその世界で自分と戦い、他人と戦い、あるいは超越者とさえ戦う。これらの戦いなしに、私たちは偶さかの生を祝うことはできないのか？

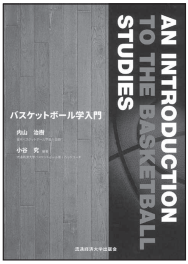
東北大学出版会

▼菅原良・松下慶太・木村拓也・渡部昌平・神崎秀嗣編著『**キャリア形成支援の方法論と実践**』（A5判・三四二頁・三三〇〇円）加速度的に変化する社会背景の影響を受け、迅速かつ持続的な対応が急務となっている大学でのキャリア教育。現場を知る二〇名のスペシャリストたちが、多様な論点・視点からキャリア教育のいまを検証。高等学校での指導と大学におけるキャリア教育の「接続」、大学でのキャリア教育と専門教育の「交流」、大学から社会への「移行」をキーワードに、新しい時代に即応できる新たなキャリア教育を提言する。

▼間宮啓壬著『**日蓮における宗教的自覚と救済―「心み」の宗教**』（A5判・五三六頁・七〇〇〇円）日蓮の言葉の中にある「仏の御心」とは。伊豆流罪、小松原法難、佐渡流罪、そして身延期へと、多様な変遷を余儀なくされた日蓮の思索は、自身の宗教的自覚を研ぎ、現実超越の「こころみ」へと至る。詳細な読解と解釈から日蓮自身の思想転回をたどり、宗教学および日本思想史のアプローチによりその実像を浮き彫りにする。

流通経済大学出版会

▼内山治樹・小谷究編著『**バスケットボール学入門**』（A5判・二四八頁・一五〇〇円）本書はバスケットボールの分析・究明を通して専門性をより一層高めたいと願う人のために、導入ないし道標の役割を担う入門書である。



▼『**現代日本経済演習**』（B5判・一二八頁・一二〇〇円）日本経済の大まかな仕組みと経済学の基礎知識が学べる入門書。現代の日本経済を主要な分野ごとに整理し、読者が読み解きやすいように豊富な図表を用いて平易に解説した一冊。

聖徳大学出版会

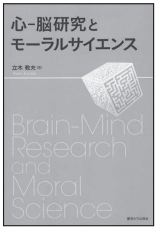
▼塩美佐枝・古川寿子・川並珠緒・関口明子・羽生和夫著『**幼児理解と一人ひとりに応じた指導**』（B5判・一一六頁・一五〇〇円）幼児理解の意義から指導計画、実際の指導法、指導要録等の書き方に至るまで、幼児理解と指導についてひととおり網羅できる一冊。

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『**改訂版　一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援**』（A5判・二一八頁・一五二八円）特別支援教育について子どもの理解と指導・支援に必要な基礎知識を初学者にも分かりやすく解説。

麗澤大学出版会

▼立木教夫著『**心-脳研究とモーラルサイエンス**』（四六判・一七二頁・二四〇〇円）サルの脳で発見され、ヒトの脳でも存在が確認されたミラーニューロン、ミラーニューロンシステム、シェアードサーキットの活動を通して、共感や利他といった心的機能の研究が進み、さらに脳全体における道徳的情報処理の機能的解明が進行している。心と脳を一体的、構造的、因果的に理解する道が拓けつつある今、脳の情報処理システムの新たな知見と展望を提示する。

〈目次〉第一章　ミラーニューロン：共感の脳神経科学的基盤／第二章　シェアードサーキット：共感から利他へ／第三章　モーラルブレイン：道徳の認知神経科学と進化生物学が拓く知見／第四章　イメージング：計測技術の進歩／第五章　ロボット：ロボットに心を感じてしまう人間の心



慶應義塾大学出版会

▼アプター著／秋草俊一郎・今井良一・坪野圭介・山辺弦訳『**翻訳地帯―新しい人文学の批評パラダイムにむけて**』（A5判・四二〇頁・五五〇〇円）「戦争とは誤訳や食い違いの極端な継続にほかならない」という定義から出発し、「ポスト九・一一」の世界状況を人文学のことばで縦横無尽に語り、分析する。翻訳研究と文学を融合させる斬新な試み。

▼高柳克弘『**どれがほんと？―万太郎俳句の虚と実**』（四六判・一七六頁・一六〇〇円）「時計屋の時計春の夜どれがほんと」普遍的な詩情を卓越した言葉の芸で生み出し続けた万太郎。誰も言葉で掬い取ることが叶わなかった近現代の俳句にはないその特質と魅力を、俳句の本質に迫りつつ論じた若手俳人の画期的論考。

▼ピーター・ポマランツェフ著／池田年穂訳『**プーチンのユートピア―21世紀ロシアのメディア支配**』（四六判・三二四頁・二八〇〇円）カネと権力に塗れたシュールな世界で、新たな独裁体制を築くプーチン。退廃から狂気へと向かうメディア中枢部から、プーチン・ロシアの実態を描く話題作。ロシア版『一九八四年』。

専修大学出版局

▼専修大学出版企画委員会編『**新・知のツールボックス**』（四六判・三一八頁・八〇〇円）ノートのとり方、資料の探し方、レポートの書き方、文章読解など、学修・研究、大学生活の必須事項を解説した導入教育テキストの決定版。二〇〇九年刊行の改訂版から、上手にネットやSNSを利用するためのアドバイスなど、二〇一八年最新情報などを取り入れ、新装版としてリニューアル。

▼李春霞著『**中国の産業発展とイノベーション政策**』（A5判・二六二頁・二八〇〇円）中国の国家戦略である自主イノベーション。中国政府のイノベーション政策の現状・効果・問題を分析し、その実態の解明と政策の評価を試みる。

▼梅田宙著『**企業価値創造のためのインタンジブルズ・マネジメント**』（A5判・二二〇頁・二六〇〇円）企業価値の創造の源泉が有形資産から知識や情報といったインタンジブルズ（無形資産）に移行していっている現代において、インタンジブルズをいかにマネジメントすべきかを考察する。

大正大学出版会

▼大正大学地域構想研究所編『**地域人**』（A四判・平均一四四頁・一〇〇〇円・毎月十日発売）「現代社会の最優先課題は、地域創生にある」をテーマに、地域の実態理解と再生の方法論をさまざまな視覚から紹介する地域情報満載の総合情報誌。地域特集では、現地取材をもとに、物事を経済的視点だけから見るのではなく、多様な文化、歴史、暮らしに至るまでを掘り起すことを目指している。一方で、地域創生とは何かを豪華連載人による、人口、産業、食文化、リノベーション、ふるさとと信仰など、社会から心の問題まで幅広い提言を毎号掲載する。

第三〇号 特集―チャレンジする蔵元／Part1「六次化」に回帰する蔵元／Part2地域の経済・文化を担う蔵元／Part3若さとアイデアで勝負する蔵元 他

玉川大学出版部

▼石毛直道・赤坂憲雄編『**食の文化を探る**』（A5判・一九二頁・二四〇〇円）赤坂憲雄がさまざまなジャンルの研究者とフィールドワークのおもしろさを伝える「フィールド科学の入口」シリーズ第七弾。人は料理をする動物である。食べることは文化である――。食文化を調査するフィールドワーカーたちが、食べることを起点に人間の営みを問う。

▼鳥越文蔵・内山美樹子監修／義太夫節正本刊行会編『**義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集成　第五期**』（A5判・各約一五〇頁・二八〇〇円）現在未翻刻の義太夫節浄瑠璃作品を翻刻活字化。四期までに続き、無形文化遺産である人形浄瑠璃文楽の原作十作を再現。理解を深める「解題」、上演・翻刻状況を知る「年表」付き。全十巻、函入り、分売不可。

▼湯浅浩史編／江口あけみ絵『**〈玉川百科　こども博物誌〉植物とくらす**』（A4判・一六〇頁・四八〇〇円）植物は暮らしに大切な役割をもっている。そのしくみや働きを、親しみやすいイラストで説明。観察や体験できる事例を交え、花や草や木の見分け方の手がかりを紹介。

中央大学出版部

▼ゲイブリエル・ジョシポヴィッチ著、秋山　嘉訳『**タッチ　距離を巡る旅**』（A5判・二七二頁・二七〇〇円）小説というジャンルに生来備わる物語ることの困難・盲点を坐視することなく、その可能性を開く作品を作り出そうとし続けている英国の作家が、芸術の創造や人間が生きることにとって不可欠な「触れること」への接近の旅に出る。人がひとり立ちし歩き初めるとき、差延べられる手に触れ、そして手を放す。当り前のように誰もがするこの過程が、人が生きることになくてならない。経なければ人は人になれない。触れることは、芸術の創造、〈作ること〉においても不可欠な働きをする。論じる・つかむことのできない、この「タッチ」に接近しようと手探りの旅に著者は出る。行く手に様々な人間の事象があらたな相貌を現す。映画、巡礼行、王の御手触れ、ナチス・コレクション、散歩、タバコ、ソポクレス、ダンテ、プルースト、シャルダン、モランディに赴き、執着、無関心、信頼、侵犯、距離の癒し、依存、解放に出会う。遍歴を共にする読者は新しい批評の誕生に立ち会うだろう。

東京大学出版会

▼寺田浩明著『**中国法制史**』（A5判・三七五頁・四二〇〇円）伝統中国法の全体像に迫る待望の概説書。第一人者が西洋と日本との比較を踏まえ描き尽くす。

▼開一夫・齋藤慈子編『**ベーシック発達心理学**』（A5判・二八八頁・二四〇〇円）子育て・保育・教育にかかわる全ての人に必要な発達心理学の基礎が一冊でわかる。保育士養成・教職課程にも対応。

▼川添愛著『**自動人形（オートマトン）の城―人工知能の意図理解をめぐる物語**』（A5判・三〇四頁・二二〇〇円）人工知能と人間の言葉をテーマとして、人と機械、人と人とのコミュニケーションにおける「意味理解の先にある課題」を考える。『白と黒のとびら』『精霊の箱』の著者が創作する新たな世界。

▼鎌田富久著『**テクノロジー・スタートアップが未来を創る―テック起業家をめざせ**』（四六判・二一六頁・一六〇〇円）いま大学発ベンチャーが熱い！　東京大学の人気講座・アントレプレナー道場の看板講師であり、現在はエンジェル投資家でもある著者が豊富な経験から指南する大学発ベンチャーのススメ。

東京電機大学出版局

▼海本浩一編著『**臨床工学テキスト　くすりと薬理**』（B5判・一八四頁・二七〇〇円）臨床工学技士を目指す方に向けた薬理学の入門教科書。薬理学で用いられる用語の意味や概念、また、様々な疾患における代表的な「くすり」の作用機序や副作用、臨床応用について掲載。各章には課題、確認問題、臨床工学技士国家試験問題とそれらの解答を準備し、効率的な国家試験対策ができるよう配慮。

▼松葉龍一・小村道昭編著『**学生力を高める eポートフォリオ**』（A5判・一六〇頁・二一〇〇円）eポートフォリオを導入・実践している組織が抱える悩みや失敗事例を共有し、今後の成功につなげるためのアイデアを紹介。eポートフォリオの基本に立ち返り、つまずきがちなポイントをピックアップ。各シーンにおける注意点を挙げ、現場での試行錯誤に基づく具体的なノウハウを伝授。現場の疑問に答える本音ベースのQ&Aも掲載。

法政大学出版局

▼牧野英二編『**新・カント読本**』（A5判・四二二頁・三四〇〇円）カント思想の現代的意義を、前批判期から晩年までの各テーマに即し、最新の視点であぶり出す最良の手引き。詳細年譜付。

▼山田・中澤・池田・武田・三浦・但馬訳・解説『**デカルト 数学・自然学論集**』（A5判・三八八頁・四五〇〇円）幾何学・代数学・力学分野でのデカルトの寄与を一望できる一冊。本邦初訳・初集成。

▼M・ゼール著　高畑祐人訳『**幸福の形式に関する試論―倫理学研究**』（四六判・四三〇頁・四八〇〇円）「幸福と道徳との緊張関係」から、凡百の幸福論を超えて幸福についての新たな思考をもたらす。

▼B・ホワイト著　脇浜義明訳『**イスラエル内パレスチナ人―隔離・差別・民主主義**』（四六・二七六頁・三四〇〇円）イスラエル建国時の民族浄化を免れたアラブ人とその子孫らの闘争に光を当てる。

▼吉田元著『**醤油**』（四六判・二七二頁・二六〇〇円）醤油の普及により食文化は一気に多彩になった。産地の特徴、製法の違い、代用醤油の登場、海外輸出時の苦労ほか盛りだくさんのエピソード。

武蔵野大学出版会

▼佐藤佳弘著『**脱！スマホのトラブル〈増補版〉**』（四六判・二〇八頁・一三五〇円）二〇一四年に発売して好評だった『脱！スマホのトラブル』の増補版。

▼佐藤佳弘著『**脱！SNS のトラブル**』（四六判・一六〇頁・一三五〇円）SNSは強力な情報発信ツールだが、うかつな投稿がトラブルを生む。SNSのトラブルの数々を紹介し、上手に使うためのノウハウを豊富なイラストで解説。

▼三田誠広著『**こころにとどく歎異抄**』（A5判・二四八頁・一八〇〇円）「親鸞の言葉そのものを、読者に届くように語ることはできないものか…？」小説家であり、武蔵野大学の教授である著者が、可能な限りわかりやすい言葉で解説した「超口語訳版の歎異抄」。

武蔵野美術大学出版局

▼高橋陽一著『**新しい教育通義**』（A5判・六八〇頁・三六〇〇円）「チーム学校と地域との連携」「学校安全への対応」等、新しい学習指導要領に対応。アクティブ・ラーニングを推進する教師に必須の教育思想と歴史の深い知識、法律と学校運営を基本から説く。

▼高橋陽一編『**特別支援教育とアート**』（A5判・二七二頁・二〇〇〇円）高度の専門性を持った指導者を必要とした障害児教育は、今や全教師が関わる特別支援教育へと変化している。入門的な解説とアートを介した実践事例を紹介。

▼志田陽子編『**あたらしい表現活動と法**』（A5判・三八四頁・二七〇〇円）法によってできること・支えられているものの知識を持つことが、自由な表現を支える基盤となる。「表現の自由」とは何かを問いつつ学ぶ著作権法入門書。

▼佐藤淳一著『**コンピューターと生きる**』（A5判・一九二頁・二〇〇〇円）使いこなしている人も、うまく使えない人も、批評的かつ積極的にコンピュータと接するスキルを身につけるための技法書。実用的な「情報護身術」は必読。

明星大学出版部

▼新学習指導要領に対応した教員養成のための教科書

▽小林幹夫編著『**道徳教育と道徳科の授業展開**』（A5判・一九六頁・一八〇〇円）

▽長谷川清之著『国語科教育入門　第2版―小学校教員を目指すために』（A5判・二九二頁・二〇〇〇円）

▽長谷川清之著『**初等国語科教育法　第2版**』（A5判・三二八頁・二〇〇〇円）

▽菱山覚一郎・廣嶋龍太郎著『**社会の理論と課題　第3版**』（A5判・一八六頁・一五〇〇円）

▽青木秀雄編著『**教職入門　第2版―専門性の探究・実践力の練成**』（A5判・三〇六頁・一六〇〇円）

▽青木秀雄編著『**教職実践演習　第2版―磨きあい高めあう熱意ある教師に**』（A5判・二六八頁・二〇〇〇円）

▼須藤康介著『**教育問題の「常識」を問い直す―いじめ・不登校から家族・学歴まで**』（四六判・二八八頁・一八〇〇円）

▼斉藤政子編著『**安心感と憧れが育つひと・もの・こと―環境との対話から未来の希望へ**』（B5判・二八〇頁・二三〇〇円）

早稲田大学出版部

▼大塚耕平著『**「賢い愚か者」の未来**』（四六判・五二八頁・二五〇〇円）

【「あとがき」より】言語、科学、文化、宗教等の文明を生物の中で人間だけが有しているのは、人間が最も優れた生物である証ではない。最も愚かな生物であるが故に、人間だけに言語、科学、文化、宗教等の文明が授けられ、その愚かさの源である欲を制することが課されたと受け止めるべきであろう。

▼水野忠尚著【早稲田大学エウプラクシス叢書】『**プレデール立地論と地政学**』（A5判・二六二頁・三五〇〇円）

混迷する世界政治と世界経済に秩序をもたらす手がかりを与えるのが、アンドレアス・プレデール（一八九三―一九七四）が提示した立地論を基礎とした世界経済論。本書は、プレデールに関する本邦初の本格的研究であり、混迷する現代に秩序をもたらす手がかりを見出そうとするものである。

関東学院大学出版会

▼星野彰男著『**アダム・スミスの動態理論**』（A5判・二八二頁・二八〇〇円）富の豊かさは商品と貨幣の増加にあり、その増産は分業→才能伸張による。自動精密機械も設計から転写される。物・動物・自然自体は能力伸長せず、富を増産しない。スミスの「見えざる手」はこの才能生産力増進の動態性を表す。近年米国の内生的成長論に呼応し、本書はスミス動態理論を初めて提起する。
序論　スミス理論研究の方法問題／第1章　ヒュームとスミスの〈勤労の増進〉理論／第2章　スミスの市場経済理論／第3章　スミスの動態理論／第4章　スミスの才能価値論／第5章　スミスの地代論と成長論／第6章　スミスの付加価値論と地代論／第7章　内生的成長論としてのスミス動態理論体系／第8章　スミス理論批判の疑問点／第9章　リカードのスミス批判の疑問点／第10章　マルクスのスミス理論批判の疑問点

▼星野彰男著『**アダム・スミスの経済理論**』（A5判・二四八頁・二四〇〇円）

▼星野彰男著『**アダム・スミスの経済思想**』（A5判・三〇八頁・二八〇〇円）

東海大学出版部

▼和田恵次著『**汽水域に生きる巻貝たち―その生態研究史と保全**』（A5変型判・一六〇頁・三〇〇〇円）汽水域に好んで生息する巻貝たちの生態的特徴を描出し、保全するうえで重要な研究成果を紹介する。

▼東海大学「航空宇宙学への招待」編集委員会編『**航空宇宙学への招待**』（B5判・三〇四頁・三八〇〇円）航空宇宙学は理学を深く理解し活用することで、人類の未来と幸福に貢献できる学問分野であるとされる。本書は、その歴史的な背景から最新のトピックスまでを概観する。

▼Tsuneo Nakajima著『**Comparative studies on the pharyngeal teeth of cyprinids**』（B5判・一七六頁・六五〇〇円）コイ科魚類は広域分布し、これまで比較する咽頭歯の形態学的研究も行われていなかった。本書では、コイ科魚類の発生学的な研究をまとめ、世界中のコイ科魚類咽頭歯系のSEM像を比較するモノグラフとなっている。〈英文〉

名古屋大学出版会

▼大塚修著『**普遍史の変貌―ペルシア語文化圏における形成と展開**』（A5判・四五六頁・六三〇〇円）前近代の世界には、天地創造に始まる人類の系譜を描く「普遍史」という歴史類型が存在した。『王書』『集史』など写本の徹底的な調査を通して世界認識のダイナミックな変容を跡づけ、歴史叙述の根底を問い直す。

▼韓載香著『**パチンコ産業史―周縁経済から巨大市場へ**』（A5判・四三六頁・五四〇〇円）戦前以来の縁日娯楽はなぜ、三〇兆円産業となりえたのか。見過ごされてきた周縁経済の躍動を、ホール、メーカー、規制の動向からダイナミックに捉え、「地下経済」論を超えた等身大の姿を浮き彫りにする力作。

▼マーガレット・ロック著／坂川雅子訳『**アルツハイマー病の謎―認知症と老化の絡まり合い**』（A5判・四六二頁・四五〇〇円）専門家との対話から見えてきた、ADという存在の曖昧さと、単一の病因を求めるモデルの限界。研究はどう進められ、臨床診断の結果や遺伝的リスクはいかに理解されるべきか。二一世紀のエピデミックと向き合う視座を与える。

名古屋外国語大学出版会

▼佐藤一嘉・矢後智子編著『**英語が好きな子供を育てる魔法のタスク　小学校英語のために**』（B5判・一二〇頁・二五〇〇円）外国語大学ならではの画期的なメソッドを生かしたタスク集。小学校英語の導入にさきがけ、教員だけでなく、さまざまな英語インストラクターにも貴重なテキストとなる。

本書の特徴……新学習指導要領に対応していること。最新の外国語教授法（タスク・ベース・ティーチング）に基づき、読む・聞く・話す・書くの四技能の指導法を学び、授業案を作成することができる。またそれをふまえ、評価の仕方、および評価基準について学ぶことができる。タスクのワークシートをコピーしてそのまま使える。ダウンロードして修正することもできる。Song task・Listening task・Speaking task・Reading task・Writing task・Story telling task・Making a lesson plans など、現場に即して、あくまで実践的で使いやすい教材をめざした。

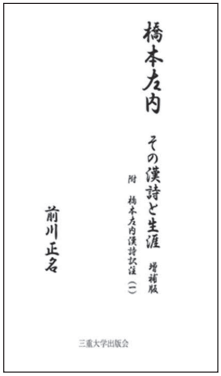
▼近刊予定『**まちづくりの論理学**』（仮題）城月雄大ほか。『**食と文化の世界地図**』（仮題）佐原秋生・大岩昌子。

三重大学出版会

▼前川正名『**橋本左内　その漢詩と生涯（増補版）**』（A5判・四四〇頁・四四〇円）。【論文篇】序章　橋本左内研究の現状／第一章　橋本左内略伝／第二章『啓発録』に見る橋本左内の忠孝観／第三章　橋本左内の漢詩概観／第四章　適塾時代の橋本左内／第五章　蘭学者時代の橋本左内／第六章　書院番及び明道館時代の橋本左内／第七章　志士時代の橋本左内／第八章　橋本左内の「忠」観　漢詩を中心に／終章　橋本左内その漢詩と生涯

【訳注篇】附篇一　橋本左内関係文献一覧／附篇二　橋本左内略年譜

▼激烈な死を遂げた志士・左内の作った漢詩の何とのどかな詩であることか。現在で言う理系人間（医学系）の典雅な詩文を読み解く。



京都大学学術出版会

▼小浜正子他編『**中国ジェンダー史研究入門**』（A5判、四九六頁・三五〇〇円）中国の長い歴史とともに変化した、ジェンダー秩序の変遷をダイナミックに描く。先秦時代から社会主義をへて改革開放の大変動まで。家族、労働、ナショナリズム、身体、LGBTなど今日的な研究視点を網羅した、初学者から隣接分野まで必携の研究入門。

▼沓掛良彦著『**ギリシアの抒情詩人たち**』（A5判、五五二頁・五二〇〇円）竪琴の音にあわせ歌われ、後世の西洋世界に深い影響を及ぼしたギリシア叙情詩の全体像を初めて描き出す。サッポーの詩がもつ神韻とも言うべき音の調べ、アルカイオスの諷刺詩、学匠詩人カリマコスらによる本歌取りの歌など瞠目すべき技巧の数々を解説する。

▼小野信爾著、宇野田尚哉・西川祐子他編『**京大生・小野君の占領期獄中日記**』（A5判・三一六頁・三八〇〇円）二十歳の学生が、初めて朝鮮戦争反対のビラを数枚配って軍事裁判で有罪に。その獄中の青春日記を同時代の歴史の中に読み解く。

大阪経済法科大学出版部

▼金哲雄著『**経済史へのアプローチ（増補改訂版）**』（A5判・二一二頁・二〇〇円）経済史の基礎的理解に役立つ経済史学の理論や、経済史全体（西洋経済史にもアジア経済史にも）に通ずる比較史的論点を取り上げながら、筆者の研究を支えている視点（宗教と経済の関係や、移民の経済的役割など）から、近代資本主義を経済史の主要な対象にして、次のような構成で「経済史へのアプローチ」を試みている。

第1章「経済史学」では、マルクスの史的唯物論などの経済史学、ヴェーバーの宗教社会学、ゾンバルトの移住論。

第2章「西洋経済史における諸問題」では、イギリス、ドイツ、アメリカにおける工業化の概観、フランス工業化の遅れ、近代西欧におけるユグノーの経済的役割。

第3章「アジア経済史の諸問題」では、東アジア経済発展の特質や中国人移民の経済的役割、韓国工業化の特質、アジア経済史における宗教の役割。今回の増補改定に当たり、『東アジア共同体』をめぐっての議論」を追加した。

大阪大学出版会

▼坂野上淳著『**みんなの体をまもる免疫学のはなし　対話で学ぶ役立つ講義**』（四六判・二三〇頁・一六〇〇円）妊婦にネコが危ない理由。ワクチンを効果的に接種するには？　なぜビタミンDが骨粗鬆症の治療に使われるの？　対話でまなぶ免疫学のはなし。

▼堀江剛著『**ソクラティク・ダイアローグ　対話の哲学に向けて**』（四六判・二五〇頁・一九〇〇円）対話の方法としてのソクラティク・ダイアローグを紹介するとともに、「対話」と「哲学」に関する考察を展開する。

▼今西一・飯塚一幸編、石川亮太・中村平・天野尚樹・三木理史・石原俊・水谷清佳・井潤裕・広瀬玲子・玄武岩著『**帝国日本の移動と動員**』（A5判・三六四頁・五八〇〇円）日本がアジアを侵略した時代。朝鮮沿岸への出漁、台湾高地での土地の囲い込み、満州の鉱業移民を検証。国内、硫黄島の住民問題、また朝鮮における愛国婦人会活動、在韓日本人女性の帰還ほかを詳細に論じる。

関西学院大学出版会

▼安岡匡也著『**少子高齢社会における社会政策のあり方を考える**』（A5判・二四〇頁・二六〇〇円）

▼岡田弥生著『**「眼」から「薔薇」へ―F・H・ブラッドリー哲学から読み解くT・S・エリオットの自意識の変容**』（A5判・四〇八頁・四八〇〇円）

▼関西学院大学総合政策学部発行　小西尚実編著『**グローバルキャリアのすすめ―プロフェッショナル講義**』（A5判・二〇八頁・一五〇〇円）

▼井福剛著『**古代ローマ帝国期における北アフリカ―カルタゴ周辺地域における文化と記憶**』（A5判・一七二頁・三六〇〇円）

▼芝野松次郎編著『**ソーシャルワーク研究におけるデザイン・アンド・ディベロップメントの軌跡**』（A5判・二八六頁・四〇〇〇円）

▼廣田佳彦著『**教育の基本**』（A5判・一三〇頁・一二〇〇円）

▼林宜嗣・中村欣央著『**地方創生20の提言―考える時代から実行する時代へ**』（A5判・二九二頁・二八〇〇円）

関西大学出版部

▼伊藤誠宏著『**17世紀フランス文法家証言集Ⅴ―前置詞**』（A5判・四二〇頁・四五〇〇円）17世紀フランス文法家の前置詞に関する見解を収集した資料文献集である。近代フランス語の形成に寄与した人々が、どのような考えに基づいて国語を精査・洗練し、作り上げようとしたかを感知できると思う。また、本書は近代フランス語の形成過程を学ぶのに役立つ貴重な著書でもある。

▼廣川嘉裕著『**政府―NPO関係の理論と動向―日・英・米におけるパートナーシップ政策を中心に**』（A5判・一五六頁・一七〇〇円）NPOは公共サービスの供給、民主主義の活性化に大きな役割を果たす可能性があるが、それには政府・行政との適切な関係の構築が不可欠である。本書では、日本、イギリス、アメリカの理論研究や実際の政策動向をもとに、NPOが独自の政治的・社会的機能を可能な限り発揮する方策を探る。

広島大学出版会

▼衛藤吉則著『**西晋一郎の思想―広島から「平和・和解」を問う**』（A5判・二〇七頁・二九〇〇円）本書は、「京都の西田（幾太郎）、広島（文理大）の西」と称された倫理学者西晋一郎の思想を「平和・和解」の視点から読み解いたものである。西は、戦前・戦中にわが国の国体論を導く一方、大戦末期に論語を題材に天皇陛下への御進講で、「食」や「兵」に比し「信」の重要性を訴えた。しかし、戦後は、西田の思想がひきつづき高い評価を得るのとは逆に、西の思想は、「国家主義的イデオロギー」の保持という漠たる指標のもと、意識的・無意識的に〈封印〉されていく。本書では、西が中心に据える〈虚〉という概念に注目し、彼の思想を、戦前における東西の思想的蓄積と発展のうちに位置づけ直し、「平和・和解」理論としての可能性を問うた。第二部では、未整理であった広島大学所蔵の膨大な西晋一郎関連資料の目録をデータ化し収録した。

九州大学出版会

▼森貴教『**石器の生産・消費からみた弥生社会**』（B5判・六〇〇〇円）部族社会から首長制社会へと変容する過程を実証的に解明。〈九州大学人文学叢書13〉

▼山本進『**朝鮮後期財政史研究―軍事・商業政策の転換**』（A5判・七〇〇〇円）近世東アジアにおいて朝鮮は国家の生き残り戦略をどのように構築したか、財政史から検証する。

▼橋本栄莉『**エ・クウォス―南スーダン・ヌエル社会における予言と受難の民族誌**』（A5判・五二〇〇円）内戦の苦難にあえぐ南スーダンにおいて植民地期から信じられている予言者の言葉とその解釈、実践を探ったフィールドワーク。

▼黒瀬武史『**米国のブラウンフィールド再生―工場跡地から都市を再生する**』（B5判・七八〇〇円）土壌汚染を抱えた土地を再生の資源に転換した都市デザインの手法を解説。

▼叶堂隆三『**「山の教会」・「海の教会」の誕生―長崎カトリック信徒の移住とコミュニティ形成**』（A5判・三八〇〇円）移住先で信仰を展開させた信徒たちの思いを社会学的に解明する。

【50音順】2018年4月1日現在

創栄図書印刷㈱	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288
大同印刷㈱	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550
ダイニック㈱	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル TEL 03-5402-1811
㈱太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821
㈱太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111
㈱竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617
㈱東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34 TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200
東光整版印刷㈱	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15 TEL 03-3632-0801
東洋美術印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-6-2 TEL 03-3265-9861
㈱トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288
図書印刷㈱	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700
㈱日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431
㈱日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-5255-2198
萩原印刷㈱	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12 TEL 03-3811-4272
㈱博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711
藤原印刷㈱	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191
㈱平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301
㈱堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5 TEL 048-422-0029
㈱毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340
誠製本㈱	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952
㈱遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111
㈱ライトコミュニケーション	〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F TEL 03-3251-7571

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

㈱朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749
亜細亜印刷㈱	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858
㈱アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360
尼崎印刷㈱	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122
㈱ALE	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627
王子製紙㈱	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072
岡本出版発送㈱	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2 TEL 048-471-6291
カクタス・コミュニケーションズ㈱	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-4-1 TUG-Iビル4F TEL 03-6261-2290
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281
城島印刷㈱	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102
㈱紀伊國屋書店	〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 TEL 03-6910-0510
㈱クイックス	〒456-0004 愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20 TEL 052-871-9190
㈱粂川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001
港北出版印刷㈱	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201
三松堂㈱	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360
三美印刷㈱	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131
三立工芸㈱	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171
三和印刷㈱	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300
信濃印刷㈱	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185
㈱眞興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181
新日本印刷㈱	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611
㈱精興社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2014年6月刊】

2013年6月から4回にわたり開催された大学出版部協会創立50周年記念連続シンポジウム「新しい社会を拓く大学の力」の成果より、2点をブックレット化しました。　日本生命財団学術書出版助成図書

座小田豊　ざこたゆたか（東北大学大学院文学研究科教授）
田中克　たなかまさる（京都大学名誉教授）
川崎一朗　かわさきいちろう（京都大学名誉教授）

防災と復興の知　3・11以後を生きる

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003150-9

列島沿岸を巨大堤防で覆う？――これまで通りの高度技術をふりかざすだけで、はたして本当に強靭な社会をつくることができるのか。哲学・生態学・地震学による対話を通して、自然と社会を千年の単位で見直し、再生のための知のあり方を探る。

〈主要目次〉
第一章「ふるさと」の根源的な力と想像力の可能性（座小田豊）／第二章　森里海の連環から震災と防災を考える（田中克）／第三章　災害社会――本当に強い社会とは（川崎一朗）／終章「ふるさと」から「ふるさと」へ（座小田豊）

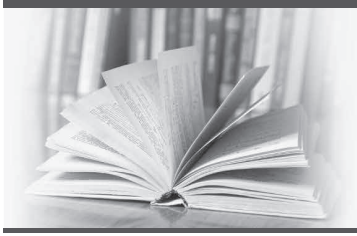
中村哲之　なかむらのりゆき（東洋学園大学人間科学部専任講師）
渡辺茂　わたなべしげる（慶應義塾大学名誉教授）
開一夫　ひらきかずお（東京大学大学院総合文化研究科教授）
藤田和生　ふじたかずお（京都大学大学院文学研究科教授）

心の多様性　脳は世界をいかに捉えているか

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003151-6

トリ、ヒト、それぞれが視る世界は同じものではない。赤ちゃんはいつごろから自分を自分と認識するのか。心の働きの多様性を比較認知科学・発達認知科学の視点からわかりやすく解き明かす。

〈主要目次〉
第一章　トリの「視る」世界――動物の錯視と心（中村哲之）／第二章　ヒト型脳とハト型脳（渡辺茂）／第三章　脳は世界をいかに捉えているか（開一夫）／第四章　討論――心の多様性と現代（藤田和生×中村哲之・渡辺茂・開一夫）／あとがき（藤田和生）



エディテージの
書籍校正・翻訳サービス

エディテージでは書籍のための英文校正、翻訳、組版など、各種出版サポートサービスを行っております。英語ネイティブでない著者によって書かれた英語原稿の出版前校正と、日本語書籍の英語化のための翻訳・校正の両方に対応。経験豊富なプロジェクトマネージャーがお客様の書籍プロジェクトを責任をもって担当し、書籍出版までのすべてのプロセスで綿密にサポートをいたします。

選べる3種類の書籍サービス

書籍英文校正サービス
英語原稿の英文校正

英語ネイティブではない著者が執筆した英語の書籍原稿を英文校正して、国際出版レベルの英語にブラッシュアップ。

書籍翻訳・校正サービス
翻訳＋スタンダード英文校正

日本語のオリジナルの意味と文体を汲み取って翻訳し、専門分野を理解した校正者がさらに英語に磨きをかけます。

ベーシック書籍翻訳サービス
翻訳のみ

日本語で執筆された書籍の英語版ドラフトの作成をご希望の方におすすめのリーズナブルな翻訳サービス。

書籍出版に便利な各種オプションサービス
上記2サービスには各種オプションサービスが追加できます。

- 組版
- 索引作成
- 書籍カバーデザイン
- 書籍印刷

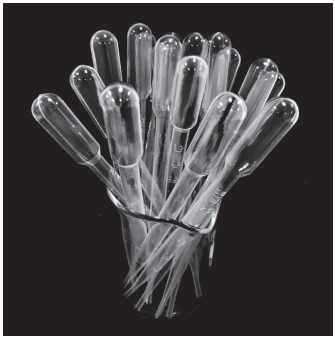
書籍校正・翻訳サービスをご利用の大学・研究機関

- 一般社団法人　京都大学学術出版会
- 人間総合科学大学
- 一般社団法人　日本物理学会
- 一般社団法人　大学出版部協会
- 株式会社　早稲田大学出版部
- 公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター
- 公益財団法人　国際文化会館
- 公益社団法人　化学工学会

edtage by CACTUS

書籍校正・翻訳サービスの詳細・ご注文はこちら
www.editage.jp/book-services/

エディテージはカクタス・コミュニケーションズのサービスブランドです。
〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-4-1 TUG-I ビル4階
050-6861-0505 | servicedesk@cactus.co.jp



表紙写真：3mlのピペット

撮影：Pualuu [CC BY-SA 4.0], via Wikimedia Commons
URL：https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/7773/Transfer_pipette.jpg

※季刊『大学出版』は、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードいただけます

大学出版114号（2018年春）
2018年4月1日発行
頒価100円（〒共）

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

■ 北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

■ 聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

■ 麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3331　FAX 04-7173-3154

■ 慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311　FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL 03-5280-3433　FAX 03-5280-3563

■ 法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部
〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7811　FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

■ 名古屋外国語大学出版会
〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503　FAX 0561-75-1723

■ 三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ 3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-5870

■ 広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
広島大学図書館内
TEL 082-424-6226　FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160